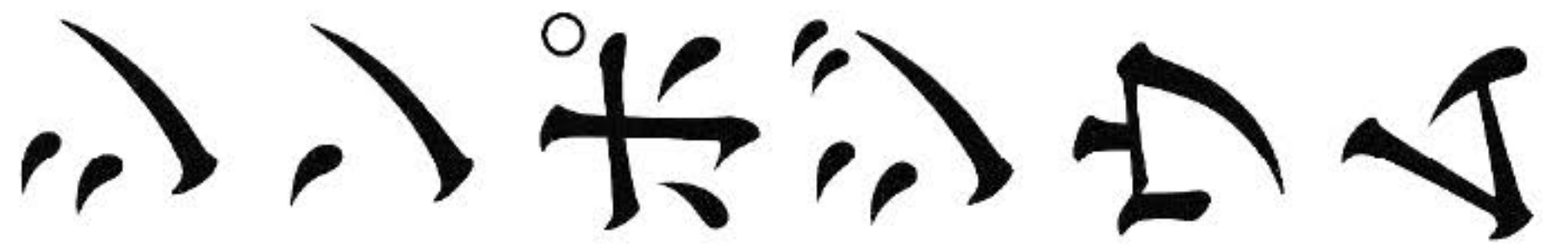

一・開会式

司会

大変お待たせいたしました。ただ今から、鹿島町合併四十周年記念事業として出版された、清原太兵衛の伝記にちなんだ記念講演会とシンポジウムを開催いたします。

はじめに、今回の催しを主催しました清原太兵衛顕彰会を代表して、会長の山本清澄がご挨拶を申し上げます。

山本会長

私は、清原太兵衛顕彰会会長で鹿島町町長の山本清澄でございます。本日、清原太兵衛シンポジウムを開催しましたところ、皆様方には新年早々で何かとお忙しい中、このように多数鹿島町町民会館にお集まりいただきまして、心から御礼申し上げます。

「温故知新」。古きをたずね、新しきを知るということばがございます。私町長に就任しまして以来、我が郷土鹿島町が今日のこのような発展を遂げたのは幾多の先輩、そしていろいろな方々のご尽力によって成り立ち、そして発展をしてきたという思いの中で、鹿島町に対する功績という点で新田を開発し、舟運を起こし、鹿島町が経済的にも文化的にも発展してきた中心の方は清原太兵衛翁ではないかとの思いの中で、なんとか顕彰して行きたいと考えました。そして実のところ、東京の「博報堂」にこんな考え方をもっているがどんなものであろうかということと、小説を作ろうとするとどのくらいかかるものであろうかと、試算してもらったりもしたものであります。

そういうことをやっている時に、小松電機の社長さんが周藤弥兵衛を顕彰するということで、小説・児童文学・漫画の三部作に取り組んでおられるという話を聞き、私もその考え方に感銘し、ぜひ鹿島町もそこへ委ねてみたらという思いになっていました。とはいえ、そのきっかけ作りも容易にできるわけではありませんでしたが、幸いと申しますか、一昨年本町は合併四十周年を迎えました。ぜひこの機会に清原太兵衛を顕彰しようという思いでお願いをし、皆様方ご案内のように小説・児童文学・漫画の三部作の本が完成したところであります。それに至りますまでに、皆様方大変お世話になりました。大変ありがたく感謝しておるところであります。

これからシンポジウムの中で、清原太兵衛翁の功績と申しますか業績について、先生方にお話を頂くわけでありますが、私思いますのに、清原太兵衛翁には卓越したいわゆる土木技術と申しますか、治水技術があったと思います。

同時に、なんでもこの事業を完成させたいという不撓不屈の精神があったからこそ、この事業が完成したのだと思っているところであります。特にその不撓不屈のやり遂げるという精神は、後世の者たちに大きな教訓を与えたと思っております。

本日のこのシンポジウムを契機に、より一層清原太兵衛翁をご理解いただく中で、更に鹿島町はもとより周辺市町村がより発展して行くことを心から念じています。また、本日までお世話いただきました関係者の皆様、そしてシンポジウムの講師の諸先生方にお礼を申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。本日はどうもありがとうございました。

司会　「読書感想文表彰」

賞　状

最優秀賞

鹿島町立東小学校　三年

木村愛実殿

鹿島町合併四〇周年記念事業として出版された「清原太兵衛」の読書感想文コンクールにおいて　あなたの作品は大変優れていました佐陀川の開削に尽くした清原太兵衛翁の高い志と困難を克服した強い意志を読み取られた　あなたの努力をたたえ表彰します

平成十年一月十八日

清原太兵衛顕彰会　会長　山本清澄

引き続きまして、読書感想文の優秀作品の表彰を行います。顕彰会が町内の小学生、中学生を対象に清原太兵衛の本を読んだ後での感想文を募集しましたところ、三三九編の応募がありました。

厳正に審査した結果、これから読み上げる皆さんが入賞されました。

それでは最優秀賞から発表いたします。

最優秀賞　小学校低学年の部　東小学校　三年　木村愛実（めぐみ）さん

小学校高学年の部　恵曇小学校　四年　坂本優希（ゆうき）さん

中学校の部　鹿島中学校　三年　安達洋子さん

以上三名の皆さんは壇上に上がってください。

山本会長から表彰状の授与

［以下同文］　小学校高学年の部　恵曇小学校　四年　坂本優希殿

中学校の部　鹿島中学校　三年　安達洋子殿

賞　状

優秀賞

鹿島町立恵曇小学校　三年

橋本真吾殿

鹿島町合併四〇周年記念事業として出版された「清原太兵衛」の読書感想文コンクールにおいて　あなたの作品は大変優れていました佐陀川の開削に尽くした清原太兵衛翁の高い志と困難を克服した強い意志を読み取られた　あなたの努力をたたえ表彰します

平成十年一月十八日

清原太兵衛顕彰会　会長　山本清澄

司会

続いて優秀賞を紹介します。

小学校低学年の部　恵曇小学校　三年　橋本真吾さん

佐太小学校　三年　横田千尋さん

同じく　四年　河合史保里さん

小学校高学年の部　東小学校　六年　田中むつみさん

中学校の部　鹿島中学校　一年　橋本千明さん

同じく　二年　井上雅博さん

以上六名の皆さんは壇上に上がってください。

山本会長から表彰状の授与

［以下同文］　小学校低学年の部　佐太小学校　三年　横田千尋殿

小学校高学年の部　東小学校　四年　河合史保里殿

中学校の部　鹿島中学校　六年　田中むつみ殿

同じく　一年　橋本千明殿

同じく　二年　井上雅博殿

司会

このほか佳作に入選された人は、名前を紹介し表彰に代えさせていただきます。

恵曇小学校四年　青山香澄さん

佐太小学校四年　井ノ口香織さん　平塚智子さん

東小学校　三年　井山恵理さん　桑谷豪さん　坂本博さん

四年　井上雅貴さん

五年　宮廻由衣さん　桑谷亮介さん

六年　田中あゆみさん　古瀬芙久子さん
鹿島中学校一年　森脇多江子さん　加藤美佳さん　木村大輝さん
二年　石橋佑輔さん　小笹美佳さん　小笹由梨さん　日名田直樹さん
三年　石橋裕幸さん　青山和博さん　安達光司さん

以上の二十一編でありました。

ここで、最終審査にあたられた曽田寛先生の講評を紹介します。

「最優秀の三編の感想文は、それぞれに課題図書の主題を正確に読み取り、自分にとってそれまで遠い過去の存在であった清原太兵衛の人物像と生き方を、身近にある佐陀川と重ねあわせて、自分なりにイメージ化している。

そして昔の人々が大きな夢を持って努力し、困難を乗り切り、その結果が現在にしかも身近に生きていることのすばらしさを素直に驚きを持って学び取り、それでは自分に何ができるのか、自分も大きな夢を育てたいと真剣に考えている。

以上のことが、学校・学年の違いを超えて個性的に表現されており、優れた読書感想文になった。

なお、応募の対象として今回読まれた本は、漫画と児童文学であるが、小説も若い人たちに読めるように十分に配慮されているので、今後中学校の上級生になったら、ぜひ読んで視野を広げてほしい。きっと何かを発見するだろうと期待している。」

以上の講評を頂きました。

二・記念講演

司会

それでは、これから第一部の記念講演に移ります。

「清原太兵衛の時代」と題しまして、島根県立島根女子短期大学学長であります藤岡大拙先生に、講演をお願いいたします。

講演に先立ちまして、清原太兵衛顕彰会事務局長の木村俊博が先生のご紹介をいたします。

事務局長

顕彰会事務局を担当しております木村でございます。

講師をお願いしました藤岡大拙先生のプロフィールをご紹介します。

先生は昭和七年斐川町でお生まれになり、京都大学文学部史学科に進まれ、昭和三十三年に同大学大学院修士課程を修了されました。その後、県内の公立高校で教鞭を執られたのち県立図書館にもお勤めになり、昭和六十年には島根女子短期大学へ赴任されました。平成八年三月に一旦定年退職されましたが、昨年平成九年八月、今度は学長として同大学へお帰りになりました。

その間、平成元年からは、県立八雲立つ風土記の丘所長としてもご活躍になっておりますほか、県の観光審議会、景観審議会など多くの委員としてもご活躍になっております。

また、県立図書館で「古文書を読む会」とか「出雲風土記を読む会」などで、講師として同好の士の指導にも当たっておられます。

先生の明るいご性格から、「出雲弁保存会」の会長さんをなさっていることは、ご存知の方も多いと思います。

なお、短大の小糠さんから頂いたメモでは、「郷土の歴史の語りべとして頑張りたい」とおっしゃっていると記されておりました。

先生は学外でお話されることが多く、本町にも何回かお出でになっておりますので、先生のお話を聞かれた方も多いかと思いますが、本日はメーンテーマであります清原太兵衛翁が、佐陀川を開削された当時の時代背景について、お話を伺うことになっています。どうか、ご清聴いただきますようお願いします。

では、先生どうぞよろしくお願いいたします。

藤岡

こちらの会場に来る前に、記念講演とシンポジウムの司会が、うまく出来ますようにという願いをこめて、佐太神社にお参りし、ついでに清原太兵衛の紀功碑を拝んできました。この紀功碑は、裏に回ってみると、村上寿夫さんが昭和三年撰文したものが彫り込まれており、およそ今から七十年ほど前に建碑されたもので、長年の風雨に耐えて黒ずんでおり、清原太兵衛翁の長い苦悩と喜びとがこめられているような、そういう感じを抱きながら拝み、成功を祈ってきました。

従いまして、おそらくそのご利益によってうまくしゃべられるのではないかと思いますが、何と申しましても、私は江戸時代については素人に近いような事で、どっちかと言うと、もう少し前の去年のＮＨＫのテレビドラマの「毛利元就」といったような戦国のチャンバラ時代を得意とするものだから、案外変な事を申上げるかもしれません。その点は、後程またシンポジウムの中で先生方からご指摘なりご批判を頂く事になるかと思いますが、それは私にとって願ってもない事と考えています。

それは前置きとして、実は松江藩、これは十四代続いている。正確に言えば十三代かもしれないが、普通十四代。

最初に来たのは堀尾吉晴である。もうこの時は隠居していたが、大体これも一代に数える。忠氏、忠晴と来て、この三代で堀尾家断絶。そして今度は、若狭の小浜というところから京極忠高という人が来た。これは三年で断絶。亡くなってしまった。

しばらくブランク状態があって、今度は信州松本から殿様がやって来た。これが、徳川家康の孫に当たる松平直政という方である。

今まで堀尾にしても京極にしても、三代とか一代とかですぐ消えるものだから、出雲人はもう少し長く続くような殿様が来ないかと願いを込め、松平直政がやってきた時は頼まれもしないのに、みんなが安来の方まで行って、手に手に荷物を手伝って持って松江まで運んだという話があるが、これは少し出来すぎた話で、そこまで出雲人が人がよかったかどうかは判らない。

収奪者がやってくるのを喜んだかどうかは判らないが、そんな話があるくらい出雲の人はもう少し長期政権を願っていたようである。

その願いがかなって、松平家は十代続いた。最後の定安まで十代続いたから、本当に長かったわけである。その十代は、直政、綱隆、綱近、吉透、宣維、宗衍、治郷、齊恒、齊貴、定安、となるわけである。

松平直政というと、皆さんよくご存知の、少年の頃の馬に乗った銅像が松江城にあった。私も子供のときのイメージがまだ残っている。馬に乗った雄姿、おそらく大坂の陣のときに真田幸村が軍扇を投げて天晴れと賞揚したといわれる、あの武者ぶり、それをイメージして作った銅像があった。

先程控え室で、銅像というものはいいものだ、銅像を作っておけばみんなが忘れないだろうという話をしておったが、本当にあの銅像、応召でなくなったかもしれない。そして今再建しようとしても、場所がなかなか定まらなくて、一向に前に進まないが、あれが復活する事を願っている。その直政は皆さんご記憶だと思う。

その次の綱隆という人は、なかなか立派な殿様であったようであるが、あらぬことから濡れ衣を着せられて、他所の嫁を横取りするという話にまで発展し、大変悪く言われるような殿様になった。だが、これは濡れ衣で、本当はそうではなかったと思う。

三代目は綱近で、その後の吉透、宣維と、この三人の殿様はちょっとしたことはあったが、例えば身体的な特徴とかその他でちょっとしたことはあるが、まあ政治家殿様としてにあまり大きなことはやらなかった。

六代目の殿様が宗衍という人である。月照寺の墓で亀の甲羅の上に石碑が建っている。あの墓の主が六代目の宗衍である。ある意味では大変出来た人だった。才能のある人である。才能がある人というのは兎角悲劇を伴う場合が多いが、この方も結果的には大変な悲劇の殿様だったと言っていいだろう。

三才の時にもう跡継ぎになった。勿論元服しないと正式の殿様ではなく、成長するまでは他のおじさんだとか、この場合は隣りの分家藩であった母里藩（今の伯太町）の殿様が、後見人として見ていてくれた。

元服して段々成長してきて、十九才になった時にはもう賢かった。「自分はそこいらの家老の補佐によって政治をするのではない。自分は自分の考えで政治をするのだ」とこういう風に言うのである。そして下の方から引っ張り上げた官僚というか、小田切備中尚足という、家柄にしては家老よりもっと下の家柄の出身のものをぐーんと引っ張りあげて中老という事にして、これを自分の補佐役としてつけて、「おまえと自分とはもう同格だ。殿様と家来ではない、同格だ、政治する上では」というような事まで言って、二人でこれからやるのである。

十九才から二十四才くらいまでの五年ほどは、自分の思惑一杯にやって行こうとするのである。もちろん小田切備

中が助けるが、助けるどころかこの人は自分の考えを若い宗衍にどんどん吹っかけて行ったような感じがする。

この時代の事を「御直捌き」の時代という。言ってみれば親政とでもいうか、御直捌の時代と言っている。

この間に、宗衍は何をやろうとしたかというと、当時は藩の財政は赤字であり、またこの時代はどこの藩も赤字であった。この時代とはいつ頃かというと、大体千七〇〇年代の半ば頃で、その頃には、徳川幕藩体制の矛盾がガーっと出てくる。

幕藩体制の矛盾というのは、封建社会というものは年貢で成り立っている。お米で。ところが一方密かに貨幣経済が進んできて、人間が金で物を買って生活する。そういうような状況になってきた。商業が発達してくる。一方、農村ではお米を一生懸命に作って、そこから年貢を取りたてられる。現物で取られて。一方では金が出回って商業経済が発展する。そういう相矛盾する二つの要素が同居しているような時代であった。また、われわれが終戦直後とか戦前とかのあの頃、物々交換とか、買わずにたいてい自家製で味噌も醤油も自分のところで作って食べていたから、金は要らない。金が要らなければそれほど支出がないから、質素だけれども生きて行けた。ところが、商業経済が発展すれば、味噌も醤油も買わなければいけない。そうすれば金が要る。どうしても支出が大きくなる。そうすると年貢で絞ったもので支出して、貨幣でものを買って食べたり着たり贅沢すると、どうしても藩は赤字になって行く。商業と農業は相矛盾する。江戸時代の半ば頃からようやく商業が上回ってくるようになるから、だんだん懐具合がさびしくなってくる。これで各藩が皆赤字になって行く。これを私は徳川幕藩体制の矛盾と言っている。

それでその頃の殿様や家来たちは、どうにかして赤字を何とかしようとするわけである。

それには二つの手がある。

一つは商売人・・・高利貸もおれば、物を売ったり生産したりするいろいろな商売人がいる。その商売人とうまく結託して、この商売で儲けた分をいくらか藩へ入れさせて、これを藩の財政の中へ補填して行くというやり方。

もう一つのやり方は、伸びて行く商業があるからこそ人間は贅沢していかん。この商業を押さえてしまえ。そしてむしろ農業を勧めて、農民から税金を絞る。これで経済の基礎をちゃんと抑えよう。だから商売人からの運上金などというものは極力止めてしまう。これに依存しない。だから商業など発展しなくてもいいのだ。こういう考え方、つまり「勧農・抑商政策」と言う。

どっちを取るかであるが、これからの時代というのは、何をしようと誰がなんと言ったって自然の流れで商業が発

展して行くのだから、商工業が・・・。

そんなこの時代を先取りして、商工業者とうまく結託して、年貢米でなくて運上金のようなもの、或いはまた金を貸した利潤、藩そのものが銀行のような金融をやって、そこからガバッと利潤を得て、これを藩の経営をしようと。これは時代の先取りみたいな進歩的な考え方である。実は宗衍がやった事は、時代を先取りするような伸び行く商業資本と結託するという、極めて進歩的なやり方を取ったわけである。これは本当よくやった。出雲人にしてはよくやったと思うような事である。

実は同じような事を幕府でやったのは、田沼意次であった。その田沼意次という人の時代は、宗衍のもう一つ後の時代である。松平不昧公と同じ時代が、田沼の時代である。

目をつけるところは、やはり伸び行く商業資本とうまく結託すれば、幕府の財政はこれで持ちこたえるだろうという考え方。そのことを松江藩は、もう一つ前に既にやろうとしたのだから、先見の明があったと言っていいと思う。

宗衍は若いが、なかなかそういう意味ではしっかりしていた。或いはそれを補佐していた小田切備中もなかなかしっかりしていたと、こういう風に言うことが出来ると思う。

具体的にどのような事をしたかというと、まず、これからは三つの新しい方針施策をやるんだということで、施策を三つの趣向（御趣向方という役所まで設けた）で新しい施策を展開した。

その一つは、泉府方…何のことはない、藩が経営する銀行である。その場合、藩に金がないので豪商とか豪農から金を出させ、藩と第三セクターみたいな銀行を創った。そこで利益を上げた分を折半すればよい。出資した豪商や豪農にも利益を与えるが、そこへ経営に参加した藩もいくらかは融資の利益をもらう。これで足らざるところを補って行く。これが泉府方である。

もう一つは義田方。これは税金の前納である。税金というのは予定納税制度というのがあって、現在では税金を早めに銀行から税務署が落としてしまうような事があるが、ああいう風に今の税務署の予定制度というのはその年の中の話であるが、十年分くらいも豪農に一遍に税金を前払いさせる…年貢米を…。

その代わり、その恩賞としてもうこれからは収めなくてもよいとか、五十年間は収めなくてもいいという、ものすごい恩典を与えることによって、せめて当座ほどはガバッと入ってくるような仕組みをした。農民は後で、次の殿様のときに解消されてしまうのも夢にも知らず、この時パッと飛びついたわけである。これでかなりの金が藩に転がり

込んでくるわけである。

それから次ぎは、鉄山方という役所を設け、奥出雲の方で砂鉄で鉄山師が鉄を取ったものを、他所に勝手に売るな。全部藩の方へ出せと言い、安い値段で買い上げて、藩が独占的にこれを大坂へ持って行って売れば、そのさやというのは随分取れる。独占―専売という言う、一般的には。

勿論このようにすれば、鉄山師に対しては別のバックマージンがあるわけである。この辺の山をやろう。炭焼きの広葉樹の生えている山を、お前のところに三町歩やろうとか、もっと向こうの方でやろうとか、或いはこの辺の原手の人の場合であれば、宍道湖の中の水代をやろうなどといって、要するに、バックマージンをいくらか用意しておいて、しかし実は独占的に販売をする。

これは木の実も同じことである。木の実というのは、櫨の事である。櫨といえば蝋燭である。蝋燭の灯火というのは、カンテラよりはるかに効率的なよい照明器具だったから、蝋燭はよく売れる。それをこういう所の土手などに盛んに作らせて、勝手に売るではないぞと。全部木の実方へ買い取って、自分のところが大坂へ持って行ってよい値で売る。そのさやを稼ぐ。こういう風なやり方、例えば、これなんかご覧なさい。商業経済と関わりがあるだろう。

本来封建制度の中では、年貢が一番主要な収入でないといけないのに、この方は一寸置いておいて、むしろ後から出てきた新しい商工業の方々と手を結んで、そこからさやを稼ぐというか利潤をあげる、こういう先進的なやり方をしたのである。

これがうまく行けば問題はなかった。彼は決して遊んだりしなかったが、彼にとって不幸だった事は、彼が在職中…彼は三十九才まで在職するから、実際に殿様と名前がついてから三十五～三十六年も殿様だったわけである。お直捌きに入った時期から言えば、二十年も殿様の時代があったわけである。

ところが不幸にして彼が殿様の時代になんでか分からないが、選りによって毎年毎年天災地変が襲ってきたのである。これは彼にとって本当に悔やまれる。何故に天が彼にこれだけのいじめをやるだろうか、というほどであった。

皆さんのお手元に配ったプリントがある。このプリントはざっとしたもので、私が出雲私史という本からピックアップしたものである。この本は、古本屋へ行けばまだ手に入る。桃節山という人が作った本であって、最初天保年間に出来たときには、漢文体で書いてあった。それは難しくて読めないものだから、私は横着して、明治のころから松江中学の先生をしていた谷口廻瀾という漢文の先生が、この出雲私史を和文に直したものがある。それを読みながら短時間に拾い上げたものである。それを一覧表にした。一寸急いでいたので多少ミスプリントがあるが、ほぼ概略は書いてある。それをご覧ください。

まず一番最初に、一六六九年（寛文九年）綱隆が藩主の時、綱隆というのは、松平の二代目である。

この頃からやはり大水や大風は来ていた。特に二番目の一六七四年（延宝二年）のところでは、六月に大雨が降って平地でも…平地という言い方は、松江城下の平地の事で、郡部の方の平地の事ではない。この城下の平地で八尺～九尺、水が上がったというわけである。人間が死んだのは二二九名で一四五〇戸が倒家・・・家が倒れるのは大抵大風であるが、この場合はぷかぷか浮いたというものも含めたものである。大変な被害で、米の損失は七万四、二三〇石であったという事である。

松江城下の方では、雨で二尺だ三尺だ五尺だというと大水になる。いわんや郡部の方へ行くと丈である。一丈とか一丈五尺というものすごい水で、ここで桃節山が情報を入れているのは、大体松江城下とかこの近辺、意宇郡、島根郡、秋鹿郡、楯縫郡、出雲郡、神門郡位で、あとの大原郡、飯石郡、仁多郡、あるいは能義郡こういう郡についての情報は、そう彼の耳には百％は入らなかった。特に城下を中心にした松江近辺の情報をもとにしているから、水が上がったと書いてある時もあれば全然いくら上がったか、郡部はどの位だったか書いてない場合もある。書いてないからといって水が上がっていないという事ではおそらくなくて、情報がなかったので書かなかったという事だと思う。従って浸水状況というところがブランクになっている個所は、上がらなかったという風に考えないで、ここもやはり何尺かは上がっていたというふうに考えた方がよいと思う。

ずっと行って宗衍まで下がろう。

真ん中少し下、一七三二年（享保十七年）、この年は有名な、教科書にも出て来るくらい有名な享保の大飢饉というのがある。

この飢饉は出雲だけではない。日本全国大飢饉である。その理由は、大雨だとか日照りではない。蝗害・・・イナゴやバッタが黒雲の如くに発生して襲ってきた。アフリカの方ではそういう現象があるようだが、日本の場合の蝗害というのは、イナゴよりむしろウンカと理解される。ウンカの害と言う風に。

その害による壊滅的な打撃では、出雲だけを見て頂きたいが、実に出雲の害穀十七万四、三二六石、まさに記録的な大飢饉になったわけである。ここで私が括弧書きしているのは、大水や大風でないということから、ここでは括弧

付きにした。
次ぎに一七三六年（元文元年）、この時は、十月に西北の烈風、甚雨、六三〇戸がつぶれ、十五万四、八九六把（この時だけは表現が石でなく把となっている。稲が流れたという意味だろうか）・・・石に直せないので原文のままで書いた。
その次は、三年後の一七三九年（原文四年）八月に大雨洪水、二、二二三戸、四万七、三七〇余石。
次は一七四三年、四十四年、四十五年、五十五年、五十七年、五十九年、六十年、六十一年、六十五年と、計算した人によると、実に二年何箇月に一回ずつ襲った計算になるという。
彼が在位中の三十四年間（三，四才から三十九才までの）で、大小あわせて十五回の大風水害、二年三ヶ月に一回の割合で風水害が襲っているという計算になるという。これは歴代の松江藩の殿様の中で、なんでかこの殿様だけに集中したようなお気の毒な事であった。勿論その大風水害は天のいたずらだけでなく、実はそこには構造的な地形的な、だからこれを少し改革すると水が出なくても良い事になるという意味で、ある意味では人災的な要素も混じっておったかもしれない。
何れにしても三十四年間で十五回、二年三ヶ月に一回の割合で水害が起こっている。こういうひどい事だったのである。
これだけで百姓は疲弊する。田んぼは流出する。従って年貢は余り上がらない。従って、それでなくても藩財政が苦しいのに年貢が十分に上がらないという事になると、これは困ったものである。
だからこの商業経済に目をつけざるを得なかった、という事にも或いはなるかもしれない。
これに追い討ちをかけるような悪い事が、いくつか起きた。
その一つは、まず元文二年（一七三七年）の宗衍の時代に、江戸の赤坂の松江藩の藩邸（上屋敷）が大火事で全焼した。だから直ぐにそれを立て直さねばならなかった。これは大変な費用である。
五～六年位財政経済が立ち直るまで、一寸待っておれば良いではないかと思われるかもしれないが、何といっても江戸屋敷は各藩の顔である。それがバラック建てで何年も放ってあると言う事は、松江藩の恥さらしになる。何はどう空元気を出してでも、とにかく立派な屋敷を直ぐに再建しなければならない。金がないのに無理をして、早く建てると言う事は苦しかったに違いない。

さらに、元文三年（一七三八年）には天守閣が壊れた。放っておけば良いかもしれないが、こういうのはすぐ幕府からの指摘があるものである。「相当傷んでいるようであるが」などど言われると知らん顔は出来ない。これはきちっと修理しなければならない。莫大な費用がかかる。
更に、宝暦四年（一七五四年）、少し後になるが、この頃にどうした事か、比叡山延暦寺の山門修理助役というものがかかってきた。比叡山延暦寺の山門というのは巨大な門である。あの門を直せと言う命令が幕府からきた。
こういうのを一般に国役と言う。幕府は隠密を回して見ているわけであるが、財政的に少し良くなるかなと思う時にズバッと国役をかけて、再び経済的に苦しい状態に陥れるという施策を執るわけである。参勤交代も同じような事である。国役がかかるともう足腰が萎えるほどやっつけられる。例えば、密かに琉球との密貿易とか、或いはサトウキビの専売制度などで少し金を貯めたなと思われた薩摩藩に対して、揖斐川、木曾川、長良川の三川の改修をしろという形で、ズバッと来た。一寸小銭を貯えておっても、その倍も三倍もの銭を借金してでもやらねばならなくなり、足腰が立たないようになってしまうのである。幕府が見ていて、これをやるのである。
親藩の松江藩に対しては、多少手心加減しても良いと思うのに、その松江藩に、しかも困窮していると言う事が分かっていながら、山門修理助役というものをバサッと掛けてきて、まさに何百両という金を使わせたのである。
この話が江戸藩邸から早馬で来た時には、国家老以下の多くの家老や役人達は色を失い、驚愕のあまり物を言うことも出来なかったと言われる程の、大きな打撃であったと言う。
その頃宗衍から、一寸金を借りたいからお前ら借りてこいと言われ、お小姓などが江戸の町の中の蔵宿だとか札差といった高利貸業者を回って、松江藩だが一寸金を貸してくれないかと言ったところ、すでにもう松江藩の財政内容はそういった高利貸業者の間にはことごとくデータが回っていたと言う。だから、頭下げて貸してくれと言っても「出羽様ご滅亡」・・・出羽様というのは、松平出羽守だから出羽様というといつでも松江の殿様を指す。「出羽様ご滅亡」というデマなのか実態なのか分からないが、皆高利貸仲間に知れていた。
だから、「ありません」「一両といえどもお貸しできません」と全然貸してくれなかった。それでしょんぼり戻ってきたそのお小姓達の報告を聞きながら、無念の涙をはらはらと流したと、宗衍が。殿様が。そういうふうな逸話がある位に、出羽様の財政経済は危機的な所に行っている。
そういう時に延暦寺の山門助役が、バサッと掛かってきたわけである。これは大変であった。

さらに延享という年には、皆さんご存知の出雲大社の大造営―正遷宮・・・寛文に次いで延享の大遷宮である。

これには殿様は相当金を出さなければならない。だから、出雲大社の遷宮の費用が大きく掛かってくるわけである。

そしてもう一つ、あまり一般に本に書かれていないが、平田の図書館長の藤沢先生が書いておられる事であるが、宗衍という人は割といい格好しいで、表面を繕うというか、派手にやる人である。これが江戸の藩邸にいて（参勤交代というのは一年ごとに行ったり来たりするものと思われるだろうが江戸の中期くらいになると怠けてこちらへ戻ってこなかった。十年に一回くらいで大抵向こうで住んでいる）、従って地元の状況などちっとも判らない。

こういう状況で、益々実は地元の政治を悪くしてしまうのであるが、それはそれとして、三十年も長い間殿様の位についていると、江戸では顔役である。しかも親藩であるので、溜りの間に・・・江戸城へ出頭すれば溜りの間という所に入るわけであるが、十八万六千石という禄高はそれほど大きくなくても、顔は毛利藩より良い顔をしていた。それに応じてパーパーと使ったり、交際費はすごいものだったという。

この交際費というのが目に見えないが、まさに山門修理助役だとか、出雲大社の修理だとかに劣らないほど毎年毎年巨額な費用が出ていたという事である。

もうこれでニッチモサッチモ行かないようになった。本来は商業経済と結託してなどといっていたが、これはうまく行かず、その割には収入が上がらないので、そこへもって行って支出ばかりどんどん多くなるので、どうすることも出来なくなってしまった。

そこでまだ三十九才という非常に若い、これから殿様になっても不思議でないという頃に、彼はむしろ引退せざるを得なくなった。その引退は、正に本来は腹でも切らないといけないけれども、腹は切らないが恐縮して平身低頭して引退したかというと、そのような気持ちではない。自分が止めれば少しは藩は楽になるだろう。止めてやるわ。このような考えで止めて行ったという。

というのは、彼が止めたら江戸における交際費が殆どパーになる。ゼロになる。次の十七才の少年不昧（治郷）になったら、交際費は大幅に減るので、宗衍は自分が止めてやろう。止めたら江戸における交際費が大きく減って松江藩も大分助かるだろう。だから止めてやるわと、このように逆に言うと、少し恩でも着せてやろうかという位な気持ちで止めたようである。

そしてそれ以後は出家して南海公と称し、もう贅沢三昧放埒三昧、出雲弁で言うと「ほうらつらっぱい」である。

もう遊びに遊んだといわれている。

その次に出てきたのが治郷・不昧である。不昧公も大迷惑である。お父さんがものすごい、気が遠くなるほどの大借銭を抱え、それじゃお前にやるからやってくれという訳で、その時十七才である。高校の一～二年生である。そんな子供に何千両の借金を。

その時に側についていてくれた補佐役（じいや）が、朝日丹波茂保といって六十三才のおじいちゃんであった。これから以後が、六十三才のおじいちゃんと十七才の少年とのこの奇妙な年齢的なコンビネーションでもって、ものすごい国難というか藩の難儀に立ち向かって行くのである。「じい、どうしたらいいの？」。この問いに対して、じい朝日丹波はこう言った。「徳川神君の仰せられた如く、百姓と油粕は絞れば絞るほど出ると申します。ですから百姓から税金（年貢）を絞って、そのことによって赤字財政を建て直して行く。これしかありません」と、これをやって行く訳である。だから、これから彼がやる「御立派」の改革といわれるものは、別の言葉で言えば血も涙もないような改革だったと思う。

改革のためには荒療治も必要である。しばらくは目をつぶっておれ、そうすればやがて良い時代も来よう。こう農民達に言って、或いは家来達に言い聞かせてやったような感じがする。

出雲市の南にある神門郡馬木村（真木村とも言う。現在の出雲市馬木町）に残っている年貢帳を見ると、実に六十九％の本年貢を取っている（本途物成と言って一番の正税…つまり所得税）。その部分を六十九％取っている。つまり七割である。七公三民である。普通江戸の幕府がやる善政の標準は、五公五民だといわれているので、地方の藩は六公四民位で、いくら重くても六公四民と言われていた。

不昧の時代には、七公三民である。もう殆ど農民達は、自分で肉体の再生産が出来ないところまで追い込まれてしまったのである。だから、それが苦しいから、遂にあのおとなしい出雲人がもうたまらないようになって、大百姓一揆を起こす訳である。その大百姓一揆を起こしたのは、治郷の時代の天明三年（一七八三年）。これは不昧にとっては、悪夢のような時期だったかもしれない。

三刀屋で起こった大一揆は、燎原の火の如くに斐伊川の左岸を下って行って、神門郡の大津村から武志方面にかけて大一揆になって行く訳である。

おとなしい、余程のことがないと立ち上がらないような出雲人が、たまりかねて一揆を起こすのだから、如何に収

奪が厳しかったか。苛斂誅求であったということである。しかもこの年六月から八月にかけて長雨が降っている。結果、害穀は十四万五、一八〇石に及ぶ大飢饉というか大減収であった。しかるにこの年、彼は一方ではあの油屋肩衡を千何百両で買っている。不思議な男である、不味という人は。民の苦しみが分からないだろうか。

参勤交代で一年交替で地元に戻っておれば、人民のうめき声だって直接聞こえてきたかもしれない。江戸の赤坂の藩邸にいたのでは聞こえてこない。家来だって教えない。それから向こうの家来—常駐している江戸の家来（今で言うと島根県東京事務所というか、東京事務所なら二年か三年すれば人事異動があるが）は、殿様が戻ってくるまでの間そのまま付いている。だから江戸詰めの役人も江戸詰めの家来も、地元の民情にだんだん疎くなってしまっている訳である。十年も戻ってこないとか、八年も江戸から戻ってこないといった、そんな家来が江戸に沢山いる。

地元にいる城代家老、国家老とか代官、奉行といった人は、まさに農民や町民達のうめき声が聞こえる。だからこうしないといけない、ああしないといけない、ということを殿様に具申し、向こうについている江戸詰め家老に言っても、向こうはピンと来ない。だからこの間にある大きな落差、役人の間の落差、これがやはり、結果的に人民を苦しめる事になるが、不味公がこの年に結構平然と大名物が買えたということは、今頃の我々の感覚から言うと、一寸おかしいじゃないかと思うのであるが、それは長い間江戸詰めしているため、こちらの深刻な状況がよく分からないようになってしまうためである。だから、百姓一揆にしても、直接松江の城にして三刀屋の方でガーとやっていたらえらいことだが、彼は実はそれが火が消えてしまってから、あたふたと帰ってくるということになるのである。

それはそれとして、こういう一揆まで起こるほどの大収奪を行った。

一方では遠慮なく長雨が降ったり、激しい風が吹いたりした。しかしながら、資料の表に藩庫蓄積高という欄を設けているが、これは藩の金庫にどれほど銭が溜まっているか、ということを表わしている。

ちょうど不味公の時代には、出たものと入ったものの収支決算、貸借対照表のようなものが残っている。これは「出入捷覧」といって大変貴重なもので、この間慶応大学の安沢さんという人からの年賀状によると「お宅の出入捷覧をコンピューターに入れた」ということを書いておられたが、これは大変貴重なものである。要するに何年にはどのくらい収入があって、借金との差引きでいくらの実質残高が残ったかということが、全部出てくる。その残高を表にあげてみた。

それによると、治郷の安永七年頃は、五万五、八三八両も溜まっている。…黒字になっている。安永九年（一七八

〇）には一寸落ちて三万四、〇七一両、五万、七万、七万、四万、五万と来て、彼の晩年の頃の寛政十一年（一七九九年）には実に九万両という残高、文化一年（一八〇四年）には、九万九、三七八両、十万両になんなんとする黒字になったのである。

お父さんの時、あれほど巨額な赤字で受け止めた…いくら赤字があったか計算できない…その赤字をこういう風に黒字に変えたということは、一つは激しい収奪を続けたということと、もう一つは出費の一番の根元は、出資者に、例えば泉府方なら泉府方に豪商や豪農から金を出させており、戻さなければいけないのにみんなパーにした。義田では最初十年分を固めて出してくれて十一年目から税金を出さなくていいぞと約束していながら、その約束をみんなパーにした。こういうすごい大鉈を振るうのである。

これを幕府全体で言えば「棄損令」という言い方をする。中世では「徳政令」と言うものである。

これは実際行政に対する不信につながるが、そんなことはなりふり構わずやったのである。バンバンバーンと切ってしまったのである。

これが返さなくても良い。それから大坂や江戸の高利貸屋からも相当金を借りているが、これは年々利子を返さねばいけないが、それを彼は、元金は戻すが利子は一切返さないぞと、利子棒引きを一方的にやった。それをやるとも一方で借りた金は皆パーにしてしまえばこれは軽くなる。

こういう荒療治をやることによって、余ったのである。段々余るようになって、晩年には十万両になんなんとするお金がたまった。実はこの余ったお金というのが、彼の名物収集の資金になる訳である。油屋肩衡茶入（大名物）、喜左衛門井戸（茶碗）、ながれえんご、そういう何千両、何万両といった物を高利貸と競り合ってまで買える。それだけの金を持った。

普通だったらこのくらい金が余れば、農民の税率を少し負けてやって、今までは七割とっていたが六割五部に負けてやるというようなことをするのがよさそうに思えるが、なかなか権力を握った人には、そのような思いつきが出てこないかもしれない。

寺井さんの小説を読んでいると、上杉鷹山公の話が出て来る。

上杉鷹山は上杉治憲と言い、山形県米沢藩の藩主である。名君の誉れが高く、高校の教科書で名君というと、決まって三人しか上がってこない。どの教科書も、相談したように三人である。

三人というのは、一人は肥後細川の細川重賢、もう一人は秋田県佐竹藩の佐竹義和、その南隣の山形県米沢藩の上杉治憲（鷹山）。この三人が江戸三百年を通じて、代表的な名君と言われている。

因に殿様の数は大体三千六百～三千七百人いるはずである。三千六百～三千七百人分の三位である。名君というのは、如何に、少なかったか。

その中でも、上杉鷹山は特に人気が高くて、経営者としての立場で鷹山のことが参考になるということから、雑誌などにも特集されたり、例えば童門冬二という作家が、上下二巻の小説を出したり、或いはこの間亡くなった藤沢周平の「漆の実の実る国」という上下二巻の本も、これまた特にその下巻の部において、上杉鷹山を取り扱っている。

寺井さんの小説にも出てくるように、「藩主というのは決して藩を私物化するものではない。民と共に苦しんだり悩んだりしなければならないのが、藩主である」という立場で、彼は立派に藩政改革を遂げたというようなことが出てくるが、まさにそのような点からいくと、宗衍も治郷も、鷹山から比べると確かに若干隔たりがあるなあと。隔たりという言い方をしているが、大分落ちるということである。殿様としては落ちるなあ、という感じがする。

そういう点で、松平不昧公ももう少し考えて、藩の金が溜まればもう少し民に戻しておいてやれば良かったのにと思う。

そこで、清原太兵衛の年齢の欄を見てもらいたい。太兵衛が生まれたのは、正徳元年（一七一一年）である。私がここに書いた年齢は、あくまで数え年である。歴史的に叙述する時は常に数え年で示すから、死没年から生まれた年を引いてプラス一をしたのが、その人の歳になる。従って生まれた時が一才である。これで計算していくと太兵衛の一才からずっと来て五十五才までは、宗衍の時代である。

一番風水害の激しいのを、目の当たりに見たということであろう。そして時代が変わって治郷の時代になった安永七年には六十八才、安永九年は七十才。このあたりの不昧公の時代になってからでも、激しい水害や蝗害、干害が及んだ。そして彼が七十三才の時には三刀屋、大津の大一揆が、その前の天明二年の五、六月の洪水、米価の騰貴、…米一升百銭まで上がったといわれるが、この天明二年の彼が七十二才の時の洪水が、彼に決定的な影響を与えたと言われている。というのは、私が言っているのではなく、「清原太兵衛」という昭和三年に出された本町の顕彰会（頌徳

会）から出た本があるが、これを見るとそのように書いてある。天明二年の大水害というのが、もう辛抱できない、決定的な彼の決意につながったということが出ている。

それで七十四才の時にまた大きな洪水や暴風が吹いた。それで、七十五才、天明五年にいよいよ佐陀川開削に着手した。そして彼が七十七才つまり天明七年にようやく完成する。しかし、その直前に太兵衛は亡くなっている。

そして翌年の正月に、大々的な川開きの行事が行われた。そこで三谷権太夫は、大変男を上げるということになる訳である。しかし、太兵衛は、すでにその時には泉下に眠っていた訳である。

太兵衛という人は何というか、一番困難なことをやっていて、一番果実のおいしいところを食べずに去っていった。そこに後世の我々が、気の毒であると、同情を禁じ得ない所もある訳である。

ところで、こうして彼は七十七才でなくなったが、水害、災害は依然として続いている。私は、一八〇四年の文化元年で切ったが、出雲私史によるとまだまだ後も水害はある。ところが、不思議なことにそこに被害の程度が出てこない。つまり、桃節山が被害の程度を書かない。書いたかと思うと奥飯石広瀬藩領において甚大な被害・・・奥飯石に広瀬藩があって今で言う赤来町、頓原町、及び掛合町波多、入間地区が広瀬藩領になるが、そういう所で災害が起きたということが書いてあっても、このあたり一帯で、浸水三尺だとか郡部では一丈だとかいった表現が全くなくなってくる。

これは情報が入らないという点を認めるとしても、この辺りでは水害というような問題が起こらなくなったということではなかったか。

それはやはり太兵衛の佐陀川開削が功を奏して、その影響によって、この辺が浸水しなくなったということではないかと思う。

もう一つは、藩の在庫のお金がどうか。寛正十一年の一七九九年のところでズボーんと九万両にまでアップする。つまり藩の収入が大きくなった。

このことの陰には、例えば佐陀川開削の成功によってその辺り一帯、潟の内から今まで佐太の水海といわれた部分におおきな新田とか、開墾田ができて、それがようやく一人前の国新田のようなものから本当の本田並みのものになっていって、本途物成が取れるようになった。このことが、藩の収入に大きく影響しているのではないかと、こういう風に思う。

この一覧表から言えることは、一つはこの城下の辺りでの具体的な浸水状況というものが、書かれていないという

ことは、もうあまり起こらなくなったということであろう。
それから藩財政が急好転して、九万両ラインに達するということは、その結果としての新田開発がようやく本田並みになって、年貢が入るようになったためではないか。
そういうことを、この表は示しているのではないかというふうに思う訳である。
以上、大雑把な清原太兵衛の生きたその時代の背景的なものをお話したが、これから以後少し時間を頂き、セッティングが出来たら、パネラーの皆さんとお話し合いをしてみたいと思うが、こういった時代背景の中で清原太兵衛がどのようにやっていったかということを、討議討論してみたいという風に思う次第である。大変蕪雑なお話であったが、以上で終わらせてもらう。
ご静聴ありがとうございました。

司会

先生どうもありがとうございました。会場の皆さん、もう一度盛大な拍手で、先生をお送りしたいと思います。

三．シンポジウム

コーディネーター　藤岡

それではこれからシンポジウムを始めます。
最初に、パネラーの皆さんを紹介します。
まず長野さんであります。プログラムにありますように、長野さんは山陰中央新報社の論説主幹をされており、懸賞小説の審査副委員長でありました。
寺井さんは、今回の懸賞小説に一席入選され、この本を書かれた方であります。この本を書かれたのはああいう顔をした人かと、今日初めて判ったでしょう。
次が村尾靖子さんです。村尾さんは児童文学者で、江津にお住まいです。児童文学ではいろいろな作品がありますが、先般の八雲村の周藤弥兵衛についての児童文学もあります。また、この本の表紙、清原太兵衛の顔、もっこを担いだこの様子などの挿し絵を書かれた絵の担当の方が、東京からわざわざお越しでございますので、その方を紹介します。高田勲様です。高田さんは島根県の出身です。赤来町来島という事ですので出雲の人です。
次は小室孝太郎さんです。東京からわざわざ駆けつけて下さいました。漫画を担当されました。この人は周藤弥兵衛についても、漫画を書かれました。
次は瀧倉健一さんです。この方は、古江公民館の館長さんで、佐陀川流域の住民であるとおっしゃっておられます。清原太兵衛への思いがひとしお多い方であります。
最後は皆さんご存知の朝山芳圀さんです。佐太神社の宮司さんでありますが、この本を見て、清原太兵衛の顔がよく似ているのではないかと思い、高田さんに宮司をイメージして書かれたのかと聞いてみたら、そうではなくて、例えば表面おとなしくて、しかし実行力のある人物を描こうと思ったら、こんな顔になったということです。それが奇しくも似た顔になったということで、非常にうれしい事です。
寺井さんの清原太兵衛の表紙や挿し絵は、当地出身の安達正幸さんですが、今日はご本人も家族の方もお見えになっていないようです。
以上で出演者の紹介を終わります。

これからは、最初の話題作りをして行きます。

なんと言っても難関を突破して懸賞小説の一席に入選された寺井さん。ご苦心や原稿を書くに当たって下調べをしないといけないから、ＨＮＳ研究所から色々と資料が提供されましたが、それ以外に現地を見たり自分で調査したりして色々ご苦心されたに違いないが、そこのところを五～六分位でお話ください。

寺井

それでは、たくさんのパネラーの方がおられるが、問題提起ということで私の方から若干申し上げたい。ただその前に絵の話があったが、私も表紙を拝見してどことなく私に似ているようで、私を承知して描かれたのかなと、その話を聞いていました。

小説を書いたのは初めてであり、また現職でもありいろいろ苦労はありましたが、そのようなことは私的なことであり、別の機会に廻したい。

先ず本題に入りたい。私も清原太兵衛という人については懸賞募集があってから資料に目を通したが、実に謎が多い。その要因の一つに太兵衛自身に関する資料が少ないということもある。

いま藤岡先生の講演を聞いてほっとしているところであるが、というのも私は石見の出身で、だから松江の殿様をあのように悪く書けたのだろうということだが、先生も相当松江の殿様の悪口を言われたので、ここにいても気が楽になっている。もう一点お断りしたいが物語の流れの都合上、佐太神社を悪者に仕立てた。工事の進行を妨害したという意味で…。編集者の方からどうかなという注意も受けたが、当の朝山先生が〝それは構わない〟と言われたそうで、重ね重ね地元や先生方のご理解に厚く感謝申し上げたい。

ではその『太兵衛の謎』であるが、先ず第一に太兵衛の生まれははっきりしているが、太兵衛の人間形成に大きな影響を与える父・太衛門の死が不明であって、これには二つの説があり、ひとつは太兵衛二才のとき、他の説では十三才のときとなっている。二才だと母の役割が大きくなるし、十三才では父の影響が大きくなる。私は常福寺の過去帳から割り出した十三才説を取った。

二つ目は太兵衛は法吉の生まれで白鹿城々主松田氏の家来いわゆる武士の末裔であるというが、いずれにしろ生まれたときは農家であった。それが身分制度が厳しく分けられ社会が膠着していた江戸時代に普請方吟味役まで出世できるものであろうか、という疑問である。私が資料としてもらった列士録によると佐陀川開削に関する項目が一行もない。例えば天明四年（一七八四年）に太兵衛は佐陀川開削を許されるが、この年の列士録には十郡山方の元締め頭取を仰せつかっている。同じくこの年十月十八日には大橋川の架け替えに精を出したということで褒美をいただいている。どうも私には天明四年に佐陀川開削に取り組む清原太兵衛とこの列士録の彼を同一視しがたいところがある。別な言い方をすると佐陀川を作った太兵衛と列士録の太兵衛が別人であるような感じさえするのである。藩士としての太兵衛と、佐陀川を開削した太兵衛と間の整合性に苦慮したものである。

それから開削の工法が不明である。二～三の専門家に聞いたが、明確な回答は得られなかった。宍道湖の水圧、日本海の荒波、沼沢、排水…これらのことを考えると容易なことではない。ただ出雲十郡に令を発して十郡から人夫・資材を動員しているので、これはかなり藩の権力というものがないとできないと考える。これを押し進めた藩権力と農家から立身出世した清原太兵衛に符牒を合わせるのに苦労した。

それからもう一点付け加えておくと、昔の年齢の評価が理解できないが今日より老けていた気がする。このことを今日に置き換えてみると、果たして七十四才の高齢になった彼に佐陀川開削という大仕事を藩が彼に託すであろうかという疑問が生じる。また三年の工期を終え開通式を待たずに亡くなるというが、現実の問題として在り得るであろうか。

以上、私の疑問に思っていたことを述べて終えたいと思うが、そういった疑問点をもろもろ解決してなお現実に佐陀川を開削しているのであるから、私の清原太兵衛というものは〝闘う太兵衛〟、そして作品の中で太兵衛に「佐陀川開削は戦よ、闘いよ」と言わしめた。また、彼を温かく支援した三谷長達に「彼は戦国の世に生まれていたなら、一国の城主にもなる人物よ」と言わしめたが、それに相応しい風格の人物であったように思う。なお具体的なイメージとしては先程の藤岡先生の話に出た堀尾吉晴、或いは蜂須賀小六、豊臣秀吉とはいかないまでも、それに匹敵する程の人物ではなかったかと、こんなことを頭の底に置きこの小説を書き進めていった。

なお二～三疑問点とするところがあるが、後の方で再度述べたい。

藤岡

ありがとうございました。

戦う太兵衛という話で、もし時代が戦国期であったら、もっともっとすごい人物になり得たのではないかというふうなことを考えられた。ただ個々については、いろいろな問題点がある。太衛門の死んだ年がよく分からない。ある

いは農家の生まれの者が、そう簡単に武士になれるものかどうか。また、たった三年であれだけの大工事をやった割りには、工法そのものがよく分かっていない。

あるいは老齢で七十四才にもなってから、これだけの大仕事を藩が、完成を見ないで死ぬほどの老齢であった人に、果たしてそういうことを委ねたであろうか、というような疑問を投げかけられたと思います。

パネラーの方でお気づきの方は、この問題提起を取り入れて頂くとして、とりあえず小室先生、体調と戦いながら苦闘の未完成されたと聞いているが、苦心談があればお願いします。

小室　この地の偉人清原太兵衛と出会い、漫画にさせて頂いたことに大変光栄に思っている。

本当はもっと早く本が出ている筈であるが、遅れたのは私のせいで、本当ならいつ頃出たかということは、敢えて口を閉ざして知らぬ顔をするが、大分遅れた。私の持病である高血圧があって、それが出て、ちょうど半分くらい書き上げてから、手が動かなくなったり色々して遅れてしまった。

漫画にする僕の役目は、少年少女に夢と希望というか清原太兵衛の心を伝えることだと思っていたので、少年の時に使命感を持って取り掛かり、最後までやり抜くという、これだけは書き切らねばいけないと自分の心に決めていた。これだけはなんとか書き切れたのではないかと思っている。丁度一番苦しかったのは太兵衛が土堀りをする頃で、あの頃が泥沼で、僕も太兵衛と一緒にあがき苦しんで書いていた。果たして最後までいけるのかと、自分で途中から思っていたが、なんとか最後まで書き切れて幸いに思っている。本当に申し訳ありませんでした。

藤岡　本当に太兵衛と同じほど悪戦苦闘して、ついに書かれたという話でありました。

村尾さんもある意味で悪戦苦闘されたかもしれないが、太兵衛というのはご存知だったのですか？

村尾　いえ、この物語を書くようになってから初めて知りました。

藤岡　ご覧になって如何だったでしょうか。一生一代記をお書きになったわけですが。

村尾　そうですね。

私は資料をいただいて、今回の物語を書くにあたって、子どもさん達に清原太兵衛の物語をどういう風に伝えようかと考えました。

似たような話は、各地にいっぱいあります。鹿島町で清原太兵衛が生きたということを子ども達にどう手渡そうかと悩んで、なかなか物語ができなかったのです。前回は、八雲村で周藤弥兵衛という物語を書かせていただき内容はちょっと違いますが、やはり水害から村を救う話でした。

鹿島町では、地元の子どもたちに、鹿島町を築いた人はこういう人なんだよ、と特色を出して手渡したいと考えました。丁度そのころ山陰中央新報社の長野さんが「明窓」に清原太兵衛の物語が出来るという紹介をお書きになっていて、実は自分も鹿島町で育ったと書いておられて、あ、これだと思いつきました。今回の清原太兵衛の物語を読んでいただくとわかりますが、論説委員をしているおじいちゃんと、東京から来た孫とが、鹿島町へ太兵衛のことを調べに行くというストーリーの展開になっています。

色々な所へ講演に行きますと、今回のこの清原太兵衛の物語を読んでいる人がかなりおられて、あちらこちらで話題になっており、「村尾さんの書かれた物語は、長野さんがモデルですね。」と言われます。私は、笑っていますが種明かしをすると、長野さんの書かれた「明窓」が一つの突破口になって、この物語ができました。

物語作りに苦しんでいるとき、今回さし絵を担当して下さった高田勲先生が「郷土の物語だから、しっかり頑張って書きなさい。応援しますよ。」と、励まして下さいました。

この先生は、大変、幅広く挿し絵の世界で活躍しておられる方で、その仕事は、創価学会の池田大作氏の書かれた童話から、共産党の機関紙の小説の挿し絵まであります。これは、すごいことです。つまり思想や信条を越えて、この先生にぜひ挿し絵を書いてほしいと思う人がたくさんいるのです。私の記憶の中で、もう一人、こういった画家がいます。岩崎ちひろさんという、もう亡くなった方ですが、御主人も彼女も共産党の党員でした。今なら珍しいことではありませんが、彼女が絵を描いていた一昔前は、まだ、かなり困難だったと思える時代に、ちひろさんは、文部省の教科書の挿し絵まで描いています。星の数ほどたくさんいる画家の中で、これだけのことができる画家は、ほんとうに数少いのです。ある出版社の社長は、こういった仕事ができる画家はもう出てこないだろうと言っておられます。そのような方に挿し絵をつけてもらうことができて、鹿島町も私も大変幸せであったと思います。

そういういろいろな応援があって、鹿島町の子どもさん達に、この物語を手渡すことができました。

実は今、高田先生と一緒に新しい作品作りをしています。モンゴルの大火災で両足を失った少年が、日本のボランティアの女性の尽力によって、島根にある義肢装具メーカーで義足を作ってもらい、モンゴルに帰って再び馬に乗れるようになった実話です。この少年は、火傷によって両の足をほぼつけ根のあたりから切断されて、やっと命が助かるのですが、今までのモンゴルでは、このような状態になった人は、ほとんど一生寝たままで過ごさなくてはなりませんでした。ところが、この少年は義足で歩けるようになったばかりか馬にまで乗れるようになりました。物語は、ほとんど完成していて、あと高田先生に挿し絵を描いてもらえばいいというところまで漕ぎ着けました。この物語を書きながら、モンゴルについて、今まで知らなかったことをいろいろ知ることができました。モンゴルでは貧乏で学校に行けない子ども達がたくさんいます。満たされた日本では考えられないことです。でも、モンゴルでは人間として生きて行くのに、祖父から父へ、父から子へと、ずっと言い伝えていることがあります。それは、一番大切なのは、地球、自然、そして、自分達をこの世に誕生させてくれた祖先、先人、祖父母、父母だということです。それらを大切にしなくては、自分たちの未来はない。今日の自分はないと、きちんと言い伝え続けていることです。「あなたにとって一番大切なものは何ですか？」とモンゴルの青年に問いかけられて、すぐに答えられる日本の少年や青年は、数少なくなっていると思います。特に、自分が生きている地球や自然や、先人を大切に思える子ども達は数少ないんじゃあないでしょうか。

今の日本にいて、あなたにとって今一番大切なのは地球でしょうという発想は、一寸湧いてこないですよね。でも、モンゴルの人達は、民族の誇り、地球に住んでいる者の誇りを、学問はしていなくてもずっと言い伝えてきていることに感動しました。これは、とっても大切なことだと思います。ですから、今回の先人を堀りおこすことも大変意義深い試みだと思いました。

清原太兵衛は、この町で生きて、百年先、二百年先を見据えて生きていたんだと物語を通して子ども達が知ることは、大切なことですよね。太兵衛や町の歴史を知るほんのきっかけ、入り口になれば、いいと思いながら書かせていただきました。

藤岡

おっしゃるように、地球でしようという問いかけ、そういう発想はなかなか湧かないが、しかし私どもかってはお

天道様というような認識があったし、天地御代の御恵みというような教育も受けてきたが、どうも最近の教育はそういうものがなくなってしまったという感じがする。これもこの中で最終的には討議して頂かねばならないと思う。

村尾さんのヒントになった、明窓の太兵衛がいつしかおじいさんになり、孫が東京から汽車でやってくる。朝日山に登ったり何かされたので、皆さんもご覧になったかと思うが高田さんの絵がある。なかなかかっこのよい絵である。実物は隣におられるが、この中の写真と絵と結びつくかどうかというところだが、長野さん、せっかく登場されたという因縁があるが太兵衛という人をご覧になったり、今までご存知だったわけですが、今此処と太兵衛という者についてどういう感想をお持ちでしょうか。

長野

ここに七人いる中で、佐陀川で泳ぎ、夏休みの半分以上の時間を佐陀川で過ごしたというのは、私一人だけだろうと思っています。…といったことを、この鹿島町へ来るたびに枕詞にしていますが、相変わらず昔の名前で出ている長野です。

私もこんな仕事をしているので、いろいろな役どころをやらされているが、実はさきほど村尾さんがおっしゃったように小説などのモデルにされたのは初体験で、大いに戸惑っています。しかも朝山さんとか、寺井さんなどは挿絵に似ているからいいのですが、私の場合は挿絵があまり、いい男過ぎて、村尾さんの作品を読んだ子供さんたちが、こんなイメージを持ってから実物を見たらがっかりするのではないかと先ほどから心配していました。幸い生徒さんたちは、もうみんな帰ったようですので安心していますが…。

さて、清原太兵衛というと私は、先ほど村尾さんが紹介されたコラム「明窓」欄で書いた太兵衛ガニを連想します。会場でも鹿島町や近くの古江や生馬から来られた少し年配の方はご存じだと思うが、佐陀川沿岸に昔いたカニです。カニに優美だとか典雅などといった形容は似合わないが、薄紫あるいは薄いオレンジ色の鋭いつめを持ったこのカニは、まさにそんな形容がふさわしいカニであった。これが清原太兵衛の無私で、ひたすら地域のため、人のために命懸けで尽くしたイメージに私の中ではピッタシでした。

私も少し大きくなってから清原太兵衛について、いろいろ書かれたものを読んだ。例えば地元の顕彰会が出された記録とか、朝山さんの父上が昔、山陰中央新報の前身の松陽新報などに書かれたものあるいは旧藩美蹟などです。しかし、これらには太兵衛はいつ生まれて、何をして、いつ死んだというようなことしか書いてない。つまり清原太兵

衛の体臭が感じられるような具体的な人間像は、残念ながら浮かんでこなかった。

ところが今度出されたこの小説、児童文学、マンガの三部作のお陰で、六十年生きてきた私の中で、初めて太兵衛が立ち上がって行動する姿がイメージできるようになった。これまで私の想像力が不足してたといえば、その通りですが、それを埋めて余りあるものと、私の幼時体験を美しいイメージで結べるようにしていただいたという点で、三人の作者の方と挿絵を描いていただいた方に、まずもってお礼を申し上げたい。

ところでさっき寺井さんが、清原太兵衛が江戸時代のガチガチの封建制度、身分制度の中で百姓出身でありながら最終的には士分、つまり侍に取り立てられ、あれほどの事業ができたのは、一つの謎だといわれた。百姓が侍になるということは確かにめったにあることではないが、稀にはあった。太兵衛の場合、あの時代に松江近郊では水害を防ぐことが最も肝要で、そのための手段を太兵衛が、最もよく知っていた。それを長い年月を掛けて、身をもって周囲に納得させていたからだろうと思う。佐陀川開削を十数回も建言し、七十歳を過ぎてからやっと事業を命じられるが、実力のない者が百回建言したって、やらせる者はいない。

実は清原太兵衛より時代が下るが、幕末に松江藩の藩校の先生になった内村鱸香という人がいる。松江の末次公園に顕彰碑があるが、これは内中原土手の油屋、つまり町人の出身だ。この油屋がどの程度の商人だったのかよく分からないが、鱸香自身、子供のころ油つぼを担いで行商に歩いたというから、製造・小売りを兼ねたあまり大きくない商売で、豪商でなかったことだけは確かだ。

しかし学問が好きで、家の手伝いが終わって皆が寝静まってから灯りをつけて本を読み、このため父親からこっぴどく叱られたりしている。同情した母親が近所のお寺の和尚さんに読み書きを教えてやって欲しいと頼み、やがて父親が死ぬと、その能力を惜しんだ和尚の口添えで京都・大坂、次いで江戸に上り、私塾で勉強する。どこでもよく出来たものだから、松江藩の士族の子だということにしてもらって、全国から秀才が集まっていた昌平黌（今の東大の前身）に入った。ここでも優秀な成績だったらしい。卒業すると本人は大坂で私塾を開こうとするが、数少ない昌平黌出身者を松江藩が放っておかない。直ちに呼び戻され藩校・修道館の先生にさせられる。最初は十人扶持だったが、最終的には確か八十石取りで、殿様の子供たちを教える身分にまでなっている。

維新後、松江の西茶町に私塾・相長舎を開講。教え子三千人といわれた。元首相の若槻礼次郎、日本の近代オリンピックの父・岸清一、近代法制産みの親・海謙次郎ら近代の日本的、いや世界的規模で活躍した郷土の先覚者のほとんどが鱸香の教え子です。

われわれは江戸時代というと厳しい身分制度の中で、どんなに能力があっても農家の子は農民、商人なら商人、武士の子はどんなに出来が悪くても侍になったと思っているが、清原太兵衛や内村鱸香のように卓越した能力を持ち、さらにそれを認める実力者と運に恵まれた者は、稀ではあるけれども体制側に取り立てられて、実力を発揮することができたようだ。こんな柔軟性が江戸三百年を継続させたのかな、と思ったりしている。

それからもう一つ、太兵衛が佐陀川開削に当たって採用した工法のことだが、これはもちろん本やだれかの弟子になって学ぶといったものではなかったと思う。子供の時から何回も水害を目の当たりにして、百姓たちが土のうを積んだり、土手に打ちこんだ杭に割った竹を編み込んだりする方法を身につけていた上、長じてからは独学で、測量技術はじめ今日の土木工学技術に近いものを考案したり、どこかで見て来て、いわゆる実学を身に付けていたと思う。

そうした点で創作者の寺井さんは、非常にうまく書いておられ、藩侯に従って江戸に行く道中のあちこちで、河川工事などがあると熱心に見て回ったとされている。多分あれに近いことがあったのではないか。農産物や工芸品、あるいは城下の防衛などは、それぞれ国の国家機密だったが、普通の河川工事はそれほど秘密ではなかったと思われる。それにしても今のように電卓や土木機器などのない時代に目学問と耳学問だけであれだけのことが出来たのだから、秀吉や加藤清正の戦国時代なら立派な大名になっただろうと思う。しかし太兵衛には、そんな巧名心や野心は全く感じられない。

藤岡

ありがとうございました。

子供の時から佐陀川で産湯を使い、そこで水浴びをしたり、或いは太兵衛ガニと戯れた経験があると、まさにミスター佐陀川であると長野さんはおっしゃっていたが、長野さんにおそらく勝るとも劣らざる経験と恩恵に浴しておられる瀧倉先生、公民館長さん、太兵衛に対してどのようなお気持ちをお持ちでしょうか。

瀧倉

私はご紹介頂いたように、佐陀川沿岸の古江公民館に務めております瀧倉であります。

住まいは古浦から長江へ越える猪の目峠の出口のあたり、トンネル構想もあるようで、トンネルがつけばすぐ隣りになるような所であります。

実は私は顕彰会のこの度の催しの協賛団体である川津、城北、法吉、生馬、古江の公民館の中で佐陀川に一番近い一地域住民という立場でここへ立たせてもらった。先ず、第一点として申し上げたいのは、この度、鹿島町はすばらしい思いつきをされたと思っている。それに応えて本日ここにお並びの著作者の方はすばらしい作品を作られた。私も三部作を読ませてもらったが、いずれも本当に感銘を受けました。先ほど藤岡先生の話を聞くと、かつては水害に見舞われた宍道湖周辺の市町村の中で、清原太兵衛の顕彰を他に先駆けて鹿島町がやられたことは本当に敬服に値する。

水害から護られ、商工業の発展などに一番大きく貢献を受けたのは、おそらく松江市が一番だろうと思う。鹿島町のすばらしい計画に松江市民の一人として敬服する次第である。

やはり土地柄であろうか、ここに昭和三年十月に先程来話題になっている佐太神社の前に紀功碑が建てられた時に、同時に出版された佐陀川に関する図書を持って来ている。この本の巻頭は佐太神社の先代の宮司朝山皓さんが書いておられる。今から七十年前に紀功碑が建てられ、この本が発行されたということである。それだけ鹿島町の土地柄は、清原太兵衛に対する思いが篤い地域であることを改めて認識した次第である。このたび立派な作品が出来たので、将来これが映画とかテレビドラマに発展すればなお良いのだが、そうなれば全国に知られるようになるのではないかという感じがしている。

第二点目に公民館というのは、生涯学習を進めている立場である。最近とかくこのような先人の恩というような事が忘れられがちな風潮である。私はかつてある先輩に、汽車に乗った時に何か感じることがあるか？　と聞かれたことがあり、何も感じませんと答えたところ、その方が言われるには、鉄道を開設するにはたくさんの工事過程で犠牲者があったり、或いは機関車なども大変な苦労を積み重ねて発明した物である。だから一瞬でもよいから汽車に乗った時には、そういう先人の恩に思いをはせ感謝することが大事であるということを教えられたことがある。

私は出来るだけ多くの方がこの本を読んで清原太兵衛と、佐陀川に思いを馳せて、豊かな心が育つ基になればいいんじゃないかという気がしている。

そこで私の提案であるが、例えば、松江大橋の犠牲者になった源助供養が今も行われているように、毎年清原太兵衛を偲ぶような行事が行われればなお良いという気がする。

私は朝日山へよく登る。清原太兵衛もずいぶん朝日山と縁が深かったようであるが、朝日山に登ると、佐陀川のほとんど全流域が望める。あそこは県立公園でかなり登山者もあるから、あそこに清原太兵衛の功績或いは佐陀川開削の説明の看板でも立てれば良いではないかという希望を持っている。

第三点目は本を読んで思ったのは、工事の人夫、或いは資材は出雲藩十郡から集めたということだが、私は佐陀川流域の皆さんの祖先に当たる方が一番犠牲も多かっただろうと思う。用地提供や資材の提供などおそらく流域の家庭には色々な言い伝えのようなものが残っているのではないかと思うので、そのような話が残っておればこれも清原太兵衛そのものも勿論偉い方であるが、そういう協力した地元の方々の苦労話も大事に語り伝えられるべきものであろうと思う。それと同時に、流域の方々にはこういう開削に協力したという誇りを持って頂きたいと思う。

長くなるが最後に佐陀川に対する思い出というのは年代によって異なる。例えば、私の近所に佐太神社の近くから嫁に来たおばあさんがいる。長野さんが泳いだという話があったが、そのおばあさんも子供の頃佐陀川でよく泳いだ。その頃、萩の夏みかんを積んだ船が上ってきて、「みかん頂戴」と大きな声でみかんをねだると、船頭さんがやや腐りかけた夏みかんを投げてくれた。やがてその後に同じような形の船が上がってきたので、またみかんだろうと思って「みかんをくれ」と言ったら、その船は黒い石炭を積んだ船であったと、そういう話をしてくれた。だから当時は運河として交易の面で非常に役立っていたということがこの話でも分かるわけである。

私は、中学一年の夏休みの時に国民皆泳の時代であったので、全員一週間松江の大橋のたもとから合同汽船で江角の港まで通った。私は電車通学であったので、今はもうなくなった浜佐田という電車の駅で降りて、下の桟橋で合同汽船に乗り換えて、皆と一緒に江角へ行ったものである。その途中で先生が、佐陀川は開削された川で、この辺りが一番難工事であったという話を聞いた。今もそのような思い出がある。

今の子供たちは魚釣りぐらいしか思い出はないかもしれないが、年代によって思い出というのは貴重な語り種であると思う。そういう話も今後大事にし、例えば「思い出集」というような物も残していけばよいと思う。

まだ言いたいこともあるが、時間が参ったので以上にして後の時間があれば話したいと思うが、何れにしてもこの度の出版事業は、いろいろな面で大変良い効果が膨らんでいくのではないかと思う。本当におめでとうございました。

藤岡

ありがとうございました。

いろいろと有益なご示唆、面白いことを聞かせてもらったが、水浴びしていると船が上ってきてみかんを投げてく

れたとか、石炭船が上ってきたとか、先程控え室で朝山さんは藤蔓を積んだ船が奥の方から宍道湖を通って入ってきて佐太前で降ろして講武の方へと運び、そこで十五敷の下へ敷く藤布という物を作ると、そういう船も行き来したという話も聞いた。そういう意味では、かつてこの運河が運搬とか交通、交易のため随分利用された。そういう風物詩というか語り種というものも、やはり何かの形で留める必要がある。それからまた、犠牲になった家庭があった筈だ。そのような先祖を持っている家庭ではいろいろな言い伝えがある筈だから、そういう物も記録しておく必要があるという、誠に有益なご示唆があったと思う。

さて、宮司さん、佐陀川と佐太神社は切っても切れない関係であり、あなたの父上は研究家としても大変高名な方で、また朝山さんが顕彰会の理事としてご活躍になっておられるが、具体的な質問を一つさせて下さい。先程から寺井さんが出された中に、例えば農家に生まれた者が士分になれるか、これについて長野さんは他の方の用例を使ってなり得たであろうと言われた。それから、おじいさんになった者を藩の大事業を当てるということが本当にあったであろうかという話があったが、寺井さんの疑問に一つでも二つでも何か答えというか意見があればお聞かせ下さい。

朝山

太兵衛については多分昭和三年の「清原太兵衛」という本は、父が書いたものと、原稿が残っていないのではっきりしたことは言えないが、多分そうだろうと思う。父から太兵衛について全く資料がないので、どこそこに資料があったそうだがもうなくなったという話ばっかり。例えば長野さんの実家の近くに古志の長野家の総本家がある。これを「表」という門名の家、そこが没落して、親戚であった下佐陀の「南」というこれも旧家だが、そこへ「表」の資料が皆行った。その中に佐陀川に関する資料があったと言う。それも「南」がなくなったためになくなったんだとか、或いは神門郡の或る庄屋の家に資料があったそうであるが、これも家に不幸が続いたので、どうもその不幸が続くのは佐陀川開削の資料があるからだと言うので、それも焼いてしまったというような、そのような話ばかりで、資料があるということは一つも聞かなかった。

いま清原太兵衛家の言い伝えでは、藩命によって作ったのではない。太兵衛の進言・献策によって三谷長達の許可を受けて佐陀川開削をした。他の家老はすべて反対したのだと。ただ朝日丹波の後を受けて、三谷権太夫が松江藩の執政になるわけであるが、その執政になったため、ほとんど松江藩の権力を一手に握るわけであるから、それの許可を受けて始めたのだと。

初めはどうも川幅を五十間にしよう。そうでないと松江の洪水は防ぎ切れないのではないかと、考えていたようだが、それが四十間になり、四十間がまた減って今の二十間になってしまった。それは費用の面でそうせざるを得なかった。太兵衛は家族の者に、二十間になって大変恥ずかしいことだ、と言っていたそうである。

百姓というような身分から士分に取り立てられていくということが、他に例があるかと言うと、一寸先程長野先生がそういうこともあるのだと言われたが、太兵衛の土木技術を非常に高く買ったということから、そういう扱いをしたのではないかと思っている。

今の佐陀川を見て、前の佐陀川というのは全く違うので、例えば多久川などは元々は北に向かって流れていたし、途中から南に流れていくわけである。宮内の沓川から流れて出ているのが北流している。宮内から流れ出ている川は、南へ向かって流れるという形であった。そういうことになったのは、太兵衛が佐陀川を堀った。そして田んぼを作るわけであるが、水の関係でそのようにしたようである。

佐陀川を掘る中で、三個所の難工事の場所があったというが、一番最初の難工事は、潟の内である。潟の内があんな工事であったのは、湖の真ん中に川を作るわけであるので、両方に土手を築かねばならなかったから。次に佐太神社の場合で身澄みの池といってお清めをする場所があるが、そこは舟木の輪という今の佐陀川は浜佐田まで直線であるが、元の佐陀川はあそこで大きくカーブしていて、今の上佐陀の方に向かって流れていって、あそこは湾曲している。そこが非常に難工事の場所だった。そして鵜灘の非常に軟弱地帯ということである。元々佐陀川というのは、宍道湖から恵曇まで川が通じていたのだという説もあるが、どうもそれはおかしいようである。恵曇まで通っていなかったのではないか。それは佐太神社より恵曇寄りの佐坂の所で南と北とに川が流れを変えていたのではないか。どうもそのように考えられる。

こういうふうに佐陀川を作ったわけであるが、太兵衛は一身を捨てて作り上げたし、人夫は十郡寄せ、出雲十郡の人夫・・・出雲私史を見ると七万人とか出ているが、そういう人達の血と汗でできたものである。

できた当時は、石ころ一つ佐陀川の中に投げるな、と言っていたようであるが、それが段々薄らいできて、要らない物があると佐陀川に捨てるというような面があるようであるが、佐陀川は血と汗の結晶であるので、もう少し大切にしたらどうかと思う。

藤岡

ありがとうございました。

なるほど、血と汗の結晶としてできた佐陀川であるので、当時は石ころ一つ投げ入れるなということを、大人から子供までみんな意識していた。しかるに、今や川に対して何たることであろうか。私の様に他所から来た者・・・出雲人ではあるが・・・でもそこには佐太前より向こうからレジャーボードが、ずっと両側に占拠しているという姿は、石ころ一つ投げ入れるなという、かつての心構えと果たして整合するかどうか、これは皆さんの意見を伺いたい所である。

一応これでパネラーの先生方から、それぞれ第一回目の発言をいただいた。これからはフリーにどなたからでも、と行きたい所であるが、まず寺井さんが先程もう少し言い足りないと、書いている間にいろいろ疑問が出てきたこと、疑問を四点挙げられたが、もう後二～三点あると言われたので、そのことを聞いてみたいと思う。それでは寺井さん、どうぞ。

寺井

私の創作に当たっての清原太兵衛の謎というか不明の点について、もう少し付け加えてみたい。

太兵衛はあのような形で佐陀川開削を成功させるが、一応仕事は九月末に完成し翌年一月に開通式を行い、その間に「恩賞」という話が出るが、太兵衛には一切その話が伝わらない。清原家が断絶しているわけでもないのに、それもない。これにはどんな理由があったのか…非常に疑問に思った。

清原太兵衛と佐陀川を知る上で唯一の清原家側の資料として太兵衛の遺言がある。その中に「今後、殿様の恩を忘れてはならない」というくだりがある。これはなにを意味しているのか興味深い。私は仮想として、清原太兵衛は松江藩から冷たく扱われたのでは…とした。そんな冷遇された藩に対して「恩を忘れるべからず」と言ったことは、いろいろな想像をかきたててくれる。

遺言の中にはまた、「佐陀川の工事に携わった役人その他関係者になるべく多くの恩賞が受けられるよう努力せよ」「工事で死んだ人の仏を我が家は懇ろに弔うように」「我が家は高慢になるようなことをしてはいけない」「子孫は佐太神社を篤く信仰せよ」さらに「佐太神社の境内や開削した佐陀川の堤防には桜の木を植え、神の御心を安め堤防の保持に努めよ」とも言っている。私は作品の中で、佐太神社は開削を妨害した勢力と位置付けているが、彼は妨害した佐太神社に敬意を払っている。前段数点の清原太兵衛に対しての疑問を指摘したが、この遺言と今も厳然として残っている佐陀川を見て、佐陀川開削に取り組んだ、強固で且つ心優しい太兵衛像を自分の中で作り上げたのである。

次ぎに、これが最大の謎であるが、清原太兵衛の死に触れたい。

清原太兵衛は天明七年十一月二十八日あるいは十二月二十八日に亡くなったということになっている。十二月二十八日ということになると、十四日後の翌年一月十一日の開通式に対して非常に劇的である。十一月二十八日となると若干期間があるが、いずれにしろどのような死に方をしたかという大きな問題が生じ、この度の私の小説の上で焦点であった。例えば考え方によれば他殺か?毒殺か?それとも詰め腹を切らされたのかもしれない…。その死に方次第で太兵衛像が様々に展開されると思う。実は懸賞募集応募者に対する説明会で、子孫の方や顕彰者の方から「清原太兵衛の死を他殺や自殺にしないでほしい」というお話があり、あのような死に方になった。もし顕彰という制約がなかったら、また別の推理が可能であったと思う。

さらにこの作品を書きながら思ったことを二点ほど付け加えたい。

一点は顕彰するということについて。何故顕彰するのか…。埋もれた業績を掘り起こす…それだけであろうか。太兵衛が偉大な功績を上げながら松江藩から冷たく扱われ（或いは抹殺された）ことへの弔いということはないだろうか…。民衆の中から悲劇的な死を遂げた清原太兵衛の怨霊を慰めるという側面はないのだろうか…。少し飛躍するが、梅原猛先生などが指摘するように、怨念の生涯を送った菅原道真や柿本人麿呂を、為政者や民衆が怨霊を慰める意味で菅原天満宮や柿本人麿呂神社を設けた…、それらとこの度の太兵衛の顕彰とに通じるものはなかったのであろうか。清原神社を作ろうという話に発展することはなかったのだろうか。……そういった妄想を抱いていた。

もう一点は教育についてである。

私はこの作品を書いている途中も書き上げてからも幾人かの人から、「小学校のとき学校の先生から佐陀川の話を聞きました」とよく聞かされた。佐陀川周辺の小・中学校では清原太兵衛のことが郷土読本といった形で取り上げられているそうだが誠に良いことだ。最近の社会では物を作るということが疎んじられている。物を作り、これを運び、付加価値をつけていくこと…これが人間の営みであると思う。ところが今の世の中では貨幣そのものが商品の対象になっている。これは何処かが狂っていると思う。私は小・中学校で地域のため血や汗を流した先人の労苦を語り継ぐということが、極めて大切なことだと思っている。（教育に関する話題も出たので、一言付け加えておく）。

あれもこれもと思っていたが意外に時間がなくて残念であるが、太兵衛そのものについては作品の中で表現してい

るので、ご批判はそこで仰ぎたい。
なお少し欠落した部分があるので触れておきたい。
一つには、この大事業に社会政策的な側面があったのではないかということ。時は天明の飢饉の最中であり、飢えに苦しむ民衆を放置しておくと暴動をも起こしかねない。そこで一日五合の米を与えて民衆の怒りを静めるといった一面もあったのではないだろうか。
もう一点は藩札との関係である。
藩札については先日、乾先生が「松江藩札と御札座」という小説を山陰中央新報社に発表されていたが、この藩札と佐陀川開削との関わりについていま一歩踏み込んで討議したいと思っている。なお斐伊川の氾濫に大きく関わっている奥出雲の砂鉄の製造については、紙面の都合で割愛した。
さてテーマとして与えられた、これからの地域活性化との関係であるが、私としてはやはり清原太兵衛を顕彰するということの意味を、太兵衛の志の確認という観点から展開していくべきだと考えている。
そこで太兵衛が佐陀川開削に賭けた次の三つの項目から入ってみたい。
1　洪水をなくし、宍道湖の氾濫を防ぐ。
2　新田を開発する。
3　日本海と宍道湖を結び、広益を計る。
1の宍道湖との関わりであるが、宍道湖は過去三回の大きな変化があった。最初は異説もあるが、多分、宍道湖と日本海はつながっていた。これが閉され宍道湖ができた。二つめは寛永年間にそれまで日本海へ流れていた斐伊川が、宍道湖へと流れを変えた。そして三つめが佐陀川の開削。これを今日的に考えると斐伊川・宍道湖・中海の水系の問題であり、なお具体的には中海干拓の問題といえよう。太兵衛が佐陀川を開削したときも公害が起きたことが文献にある。例えば塩分濃度が下がり塩田が廃止されたり、漁業も変わったり…。しかし今日では、佐陀川が自然との中で歴然と調和を保っている。自然は「変化」と「調和」の繰り返しである。中海の水系問題は余りにも斐伊川・宍道湖・中海の線が強調されているが、佐陀川の存在をもう一度思い起こして、この水系を考えてみることが太兵衛顕彰につながることになると思う。
次に2の農地の造成であるが、この地域は県下有数の穀倉地帯であり、また西日本における早場米の産地（特に九

州では軟質で美味しい島根米として銘柄も定着）だ。そこでこれからは「太兵衛米」と銘打って売り出してみてはどうだろう。あの湖北の水田を真っすぐに割って流れる佐陀川が、清原太兵衛のお陰ででき上がっていることを、特に若い人達に理解して欲しいものである。
3の川の交通について。自動車が普及していない時代には、佐陀川は今日考える以上に、交通の便として利用されていたと思う。今でもお年寄りなどから、その昔、合同汽船で佐太神社へお参りをした…という話を聞くことがある。昨年イカダ下りのイベントがあった由、報道されていたが、それらも良いことだ。特に松江市は最近湖北地区の開発に力を注いでいるようであるし、是非とも松江市との連携し、大橋川・宍道湖・佐陀川を結ぶ開発を計っていただきたい。松江市のお堀めぐりの舟も好評と聞く。太兵衛が遺言で言い残した土手の桜並木の下をのどかに舟がいく…。想像しているだけで楽しくなってい来る。
最後にひと言。どなたかもおっしゃっていました通り、歴史上の人物に或る評価を与えるということはとても危険なことで、当人は元よりそのご家族の方々に対しても失礼なことになってしまう惧れがある。私の描いた清原太兵衛は、実在の太兵衛とかけ離れたものかも知れないし、そのギャップに対し痛切に責任を感じつつ、筆を進めていった訳である。或る歴史上の人物というものは、その本人+評価を加えた人+地域の人々が描くイメージ…その三者が一体となってこそ、でき上がっていくものだと考えている。私もここに「私の清原太兵衛像」をみなさんに提供したのであって、これからは顕彰者の方々や地域の方々がこの三部作を通じて「みなさんの清原太兵衛像」を作り上げていただく番だと考えている。例えば太兵衛は実に十二回にわたり、佐陀川開削を藩に願い出たというが、これが絶対に事実かどうかは分からない。"十二回も"ということが一人歩きしてしまって、太兵衛は十二回も陳情する程、開削に対し熱心に取り組んだ…という鮮烈なイメージができ上がってしまう。
いまも清原太兵衛の銅像作りの提言があったが、もしこれが実現したなら、多くの人々がその銅像を眺めるとき、温厚でいながら芯が強く、不屈の精神をもった『清原太兵衛』として心に響き尊敬する…そんなシンボルになって欲しいことを願って、私の話を終わりとしたい。

藤岡

ありがとうございました。
寺井さんは、お書きになる時に十分に資料を使って、全体像を最初に描いておかなければならない。しかし、そこ

にはいろいろな制限もあり、さらに顕彰事業ということになると、悪いところは書けないという制限があったというご苦心も述べられたが、今のおさらいをすると、これだけの大事業をやった、しかも一生を賭してまでやった人だったのに、何故藩が恩賞をくれなかったのか、恩賞をもらったという事実がないではないか。

第二番目には、遺言状が残っているが、そこには藩の恩に報いるとか、佐太神社の大神様の信仰をしないといけない。その他、犠牲になった作業者の仏さんは、わが家の仏さんと同じように祭れとかあるが、これはむしろ逆説的な意味を持っているのではないかととることもできるのではないかという話であった。

死に方が完成して開通式の一ヵ月前とか二ヵ月前という劇的な死に方をしている、時期的に。死に方自体は、他殺であったか自殺であったかまったくわからないが、大方の見方が病で死んだことになっているが、少しできすぎたようなドラマチックな死に方というか時期であった。

顕彰するという場合には、どちらかというと反権力的なというか悲運、不運であったという顕彰の仕方もあるのではないか。おそらく百姓一揆などで犠牲になった人の顕彰をするのなどは、それに当たる。しかし、国の施策を真に忠実に行うというか、むしろこれを先取りするような努力をしたことに対する顕彰というものは、書いていく上でのインパクトという点では、若干難儀なところもあるということであったと思う。

ここで寺井さんは八点くらいの書いていく間での疑問を述べられた。

そこでパネラーの先生方、寺井さんが疑問を投げかけられた点について、一つでも二つでも何か意見があればお願いしたい。

長野

私が明快に回答できるわけではないが、私が考えていることを述べてみたい。

まず遺言にある殿様の恩ということだが、先ほど、身分制度の厳しい社会でも士分に取り立てられることが稀にはあったと言った。それはまさに稀なことで、それを太兵衛も痛いほど分かっていた。だから佐陀川開削に対しては恩賞がなかったことに多少の不服は感じていたとしても、それ以上に太兵衛は、士分にまで取り立てられて、やりたい仕事をやらせてもらったことに本心から感謝していたのではないか。それに遺言に恨みがましいようなことを書いたら名前に傷がつきかねない。下手をするとたちまちお家断絶だ。しかし、そんな実利的なことより太兵衛は「名こそ惜しけれ」という本当の武士魂を大切にした人だったと思われる。

もう一つ、佐太神社を大事にせよという点だが、これは寺井さんが書いておられる通りだろうと思う。あそこの地形を見れば分かるが、あそこは出雲国風土記にある通り「狭田」、つまり両側から山が迫っており、そこに佐太神社が鎮座されている。だが、宍道湖から日本海へ川を開削するとすれば現代の土木技術をもってしても、あの神社前をかすめる以外にコースの取りようがない。しかし当時はあそこに身澄ヶ池という禊をする佐太神社にとって重大な意味を持つ池があった。佐陀川開削はそれをつぶしてしまった。

これは神様が、現在では想像もつかないほど巨大だった江戸時代にあっては、とんでもないことで、背に腹は換えられなかったとはいえ、太兵衛が非常に恐縮したことは容易に想像できる。この工事を仮に佐太神社宮司さんは理解したとしても、あそこに職を得ている当時百人前後いたと思われる神官にとっては「企業縮小」の恐れがあり、大変なリストラを招きかねない。だから当然、猛然たる反対があったと思われる。それが最終的には宮司らの理解で、神域の身澄ヶ池をつぶして佐陀川を開削することができた。これは殿様の恩に対するのと同じぐらいの意味が太兵衛の中にはあったのだと思う。「佐太神社を大事にしろ」というのも太兵衛の本音だっただろう。

ついでですが、昔、佐太神社の境内ではないが、あの周辺にはハゼの木がたくさんあった。先ほどの藤岡先生の話にあった松江藩六代目の宗桁らが始めた特産振興の「木の実方」様の名残ではないかと思う。

もう一つ、太兵衛の死に方だが近年、中年男性の原因不明の自殺に「燃え尽き症候群」というのがある。平知盛ではないが「見るべきほどのものは見つ、為すべきほどのことは仕つ」というわけで、大仕事をやり終えた人がかかりやすい精神の空白状態らしい。

太兵衛の場合、これであってもおかしくないが、しかし、この人の精神は繊細ではあっても、そんなにか弱いものだったとは思われない。

私は全く別のことを考えている。権力闘争が渦巻く「男社会」のことだ。それは女性の場合とは、また一味違った「嫉妬」社会である。今でも政治家が鎬を削る永田町かいわいだけでなく、役人の霞が関でもそうだが、あの世界で出世するには、政治的あるいは政策立案などで力を発揮することもさることながら、人から焼きもちを焼かれないようにすることが最も大事で、これはまた長生きの要諦だとされる。田中角栄さんとか竹下登さんは、政治的手腕もさることながら、人から敵意を持たれないことに大変な気配りをしたことはよく知られている。

これを太兵衛の立場に置いた場合、どうか。百姓の生まれながら士分に取り立てられ、背後に青沼某や家老の三谷

某がいるとしても藩の普請方お目付役などになり、お掘や大橋川の普請、揚げ句には藩内に反対もないわけではなかった佐陀川の開削まで指揮するとあっては、これは実力のことは抜きにして怨嗟の的であり、大変な嫉妬の対象であったと思われる。その上、佐陀川開削完成の晴れの舞台にまで出席して主役になっては、それこそ殺されかねない。最終段階になって太兵衛は、出しゃばらない、控え目にする－という藤岡先生のおっしゃる「出雲人」らしい出雲人になった。そこへ幸か不幸か、自からの最期が訪れたのではないかと私は思っている。

私は小説などというものは書いたことがないが、私の好きな司馬遼太郎さんによると、小説にするには、主人公についての資料があまりにも明りょうで、あれもこれも全部分かっていては書きようがないそうだ。寺井さんもそうだろうと思うが、主人公の重大な点、例えば太兵衛の場合、どんな死に方をしたとか、父親が死んだのは太兵衛二歳の時か、十三歳なのか。これらは不明な方が、作者の腕を振るう場が広がるのではないか。こうした謎があるから面白いものができたと思っている。

もちろん、この場合、自殺という「殺し方」もあった。しかし、遺族の方の受け止め方も考慮すべきだし、地元自治体の懸賞小説となると、自殺させるのはやめてほしい。という意見もなかったわけではない。私自身は、自殺でもいい作品なら推してもいいと思っていたが、自殺説を取った作品には、幸いにして寺井作品を超えたものがなかった。

藤岡

村尾さん。遺言のなかに、殿様に忠義を尽くせとか、佐太神社の大神を信仰せよと言っているのは、少々逆の意味があるのではないかという、寺井さんの発言に対して、長野さんは素直にとった方が良いではないかという意見であったと思うが、そういった点について、お書きになっていてどのようなことをお考えになりましたか。

村尾

私は、昔の日本男子は、なかなか本音は言わなかったと思います。如何に格好よく死ねるかを常々考えていたと思います。「良いかっこし」と石見で言いますが、そんなタイプが、今でも年配の男の方にはけっこう残っていると思います。本当は、そんなに強くないのに強く見せたいとか、家の中では奥さんに頭が上がらないのに外では、奥さんを支配しているように見せたいとか、そんな人は現在の家庭の中でもたくさんあるでしょう。

本音と建前ではないけれど、最後は、こういう死に方をしたい。特に武士には死の美学があったと思いますよ。だから、本心はどうあれ、その時の太兵衛の気持ちとしては、こういったことを書いて死にたいと思っていた気持ちは、

ある程度本音だったような気がします。武士独得の倫理感もあったでしょうし。

前回、八雲村で周藤弥兵衛という人のことを書きましたが、このときは、墓石に刻まれたいくつかのことがある位で、資料がほとんどなくて苦労しました。それから比べれば、清原太兵衛は、子孫の方もおられるし、資料もまあまあだったと思います。しかし、小説というものは、資料がたくさんあったからといっても、実像が描けるかどうかは、分からない。後で写真が一枚出てきて、過去に書いたイメージがぶちこわされる場合だってあります。時代小説など特に、作者のイメージが強いし、物語を作りたいと願う依頼者の希望だってあります。ですから、私も、太兵衛を書きながら、いろいろな疑問が残って、辻つまの合わないところも沢山出てきました。でも、これは、嘘か真実かというよりも、こういう人が歴史上にいたんだということを伝えれば、後は疑問が残るほど後々の人が掘り起こす課題ができるのですから…。今回は、掘り起こす、ほんのきっかけを作ったという点で、町は、大切な事業をなさったんだなあと思っています。ひと昔前までは、日本でも、おじいさんが語り、おばあさんが語りしていた物語を父母から子へ、子から孫へと語り伝えていましたよね。それが、現代の日本では、だんだん消えていっています。うっかりすると、自分のおじいちゃんやおばあちゃんはどんな顔をしていたのか覚えていない子すらいる。

私が講演先でよく読むエッセイの中にこういったものがあります。前回、周藤弥兵衛のシンポでは全文読みましたが、今回は、あらすじだけにしますね。子どものころしっかりと語り聞かせた民話「さると地蔵」の話が少女の命を救ったという話です。交通事故に遭い意識不明となり、死の宣告まで受けた少女が子どものころ、しっかり心に刻み込まれた物語をくり返し聞くことによって命の糸をひき出すことができたというお話です。つまり命の糸を引き出そうにも、その元になるものをしっかり子どもの心に刻み込んでおかなくては引き出せないのです。今は、おばあちゃんが語り、おかあさんが語り、代々語り伝えるお話も、どこかでプッツンしてしまっているのではないですか。

「おばあちゃんも、お母さんも知っている地元の話を、子どものあなた達に手渡すわ」とそういった感覚で、清原太兵衛の物語をお子さん方に手渡して下さい。このことを機会にまた新しい物語が始まるかもしれませんね。子ども達の郷土を見る目も少し違ってくるかもしれません。疑問が出れば次につなげたら、また次の世界が広がり、よりすばらしい清原太兵衛が誕生すれば嬉しいことではありませんか。こういった一見地味に見えるたくさんの積み重ねや掘り起こしこそが大切なのではないですか。今回は、大変意義があることに参加させていただいて嬉しく思っています。

藤岡
小室さん。清原太兵衛にいろいろ疑問があるが、清原太兵衛があれだけの老躯に鞭打って、あれだけのことをやったのであるが、あれをやらせたのはいったい何であったのか。ええかっこしいだったのか、正義感だったのか、或いは人民民衆を救おうという気持ちであったのか、何が彼を駆り立てたのでしょうか。

小室
自分は何をやれるか、という気持ちはあったと思う。この人たちに自分は何ができるだろうかということが、子供の時代に何かがあったであろう。何かがあって、それでないと武士への道を突き進むということはなかったと思う。漠然とであろうが、自分の夢になったのではないか。そんな気がしたから、自分は始めた。子供に読ませるためには、夢をもたせねばいけない。或いは何か使命感を持たなければいけない。そこを基点に、書く時には出発した。
この間、取材にきた時には物議をかもしたが、僕も他殺説が、書いていて自然というかすごく引っかかった。しかしやり遂げて結局褒美ももらわず、それほど光も当たらず去っていくのは、太兵衛らしくていいかなみたいな部分で納得して、あのような終わり方にした。ただ、何か自分でやらなければいけないという気持ちはあったに違いない。

藤岡
もう少し時代がさかのぼるが、出雲に山中鹿之助という人がいた。この人は三十四歳という短い人生の間少なくとも最後の十五年間はとにかく寝食を忘れて出雲の奪還と尼子の再興ということに尽くすが、それは彼のいわゆる主従関係からくる封建道徳を全うしようという倫理的なものでなく、むしろ彼にとっては主家を再興し出雲を奪還するということは、自分の自己目的みたいなものになって、それをやることが自分の個人的な目標を遂行することだと。・・・・そうすると清原太兵衛がここを開通するというのは、これによって付近の人民が恩恵を受けるとか、藩が喜ぶということより前に、このことが自分の人生なんだとそんなことではなかっただろうか。

小室
そうであっただろう。やはり子供の時に持った夢を突き進んでやるんだとそういう部分があったのだと思う。だからあの年までずっと夢を抱き続けたのだろうし、多少の摩擦があってもあそこまでやったのであろう。そうでないとやはりあそこまで何故待ってでもやらなければならなかったかに、答えが出せないような気がする。
やはり心のどこかにずっと持っていたのだと思う。

藤岡
そういう点で特別何かエキセントリックでなく、意志というか特別な・・・

小室
使命感であろう。自分で宍道湖の水をひけば、大勢が助かるのではないかと自分で見えていたから、やらざるを得ない。見えた者がやるというそんな状態ではなかったかと思う。

藤岡
しつこいというか、十年かかって十二回も陳情してようやく受け入れられた。

小室
あちこちの偉人などを見るとみんなそういうところがある。何かやはり最後は使命感が残っているみたいな部分がある。

藤岡
全国的に共通しているのか。

小室
特別なことをやった人には、共通した所がある。

藤岡
寺井さん、長野さんもちょっと触れられたが、士分に取り立てられたということは大変なことだとおっしゃったが、幕府の中期以降になると封建社会は非常に成熟し、爛熟し、いわゆる官僚体制というか、侍の体制の中からは、優秀な人材が枯渇するという状態があり、できるだけ別の所から新しい人材を取りたてようという意識が各藩にそこそこあって、例えば小田切備中のような者を取り立てるということもその中の一つの方向性であるから、一般の農民でも優秀な技術的な意味もあれば内村鱸香の頭、そういう物で引こうという方向はあったと思う。
非常に難しいことではあったが、かなり門は開けていたのではないかという気がする。

瀧倉
瀧倉さん、非常にいいことを言われた。本当に地に着いたような、地元の人でないと発言できないような話をいただいたが、何か追加することはないでしょうか。

先ほどの話の続きであるが、太兵衛さんが佐陀川開削に憑かれたように取り組む、しかも七十四歳という高齢の時である。やはり自分が佐陀川を開削しなければ他にやる者はいない。手柄を立てようという気持ちは微塵もなかったと思う。寺井さんの小説によると、父に連れられて平田の旅伏山に上り、斐伊川がすさまじい勢いで宍道湖に流れ込み、宍道湖の水位が上がり、松江の市街地が水没するという状況を目の当たりに見て、これは大変なことだなという心に焼き付いた幼い時代、しかも父の影響、母の影響もあったろう。私は教育的効果からすれば、幼少時代に育てられた父の魂が清原太兵衛の不撓不屈の精神、人物を作ったのではないかと思っている。

それから三年間で成し遂げたとなっており、しかもその初年度というのは実地測量であるが、今のように土木機械の発達していない時代に、三年の工期はすごく早かったのではないか。当時は利権闘争のようなものはないわけであるが、それにしても工区を三つに分け同時に、工事を進めるなど、当時としては非常にスピードのある工事を進め、大変な力量をもった人であったと思う。

それから今、私どもが地元に住んでいて思わなくてはならないことは、もしも、佐陀川がなかったら一体今の松江はどうなっていただろうか。宍道湖周辺はどうなっていただろうか。或いは宍道湖の汚濁はどう進んでいただろうかと。これは比較することはできないが、こういうことを思うということはやはり佐陀川或いは清原太兵衛を偲ぶことにつながるわけだ。

最近宍道湖のしじみが随分死んでいて、しじみ漁をする人は困っている。この季節になると佐陀川に入ってしじみを採るが、佐陀川のしじみは色も鮮やかできれいである。そういうことを見ると、今宍道湖は汽水湖でこのような状態を保っていて、やはり佐陀川の恩恵が大きく影響しているのではないか。素人なりの感じであるが、そういう今の生活の中で佐陀川なり清原太兵衛の功績ということを思い起こしてみるためには、この度の作品は大変良い本ではないかと思っている。

かつては郷土読本というものがあった。戦後ある期間、郷土読本がない時代があった。古江に住む方々でも郷土読本を読んだことがない。だから佐陀川などについてあまり知らないという方もある。私は昨年長野さんのご出身地の古志町の実年会で佐陀川について話を聞こうということで、そういう関係の講師を呼んで講演会を計画したことがあるがこれを機会に、やはりもっとこの本を学習材料として取りいれてみたいという気がしている。

藤岡

ありがとうございました。

朝山さん小説から漫画までお三方の書かれたものの中で、清原太兵衛が事業を進めていく中で大きな困難が二つあった。その一つは長野さん寺井さんが言われた佐太神社の神域を貫通することのいろいろな問題、もう一つは藩が補償しない、つまり河川敷になった時に取られた者に全然補償の買い上げの金を出さない。太兵衛は村人の反対があったために夜中にこっそり測量をしてその部分を決めたという。夜中に測量をすれば反対することはできないが、ただで取られることには変わりはない。それで瀧倉さんがいわれるように、不利益を被る人もあるということになるのであるが、これは太兵衛の評価に対してマイナス面にはならないだろうか。つまり藩のお先棒を担いで、強引に土地をとったわけであるが・・・

朝山

多分強引に押していったのだと思う。

藤岡

それは許されることだったでしょうか。

朝山

だったのだろうと思います。

最後が明確でない。先程来病死なのか、自殺なのか、何なのか分からない。それは一つは強引にやっていったから、その責任を取るということもあったのではないか。

だからはっきりとちょっと言いにくいが、最後が明確でないというのは、そこら辺にあるのではないかと思う。

藤岡

それは藩の犠牲になったようなものですか。

朝山

ある面では、そういうものがあると思う。

藤岡

藩は例えば、度重なる清原太兵衛のやりましょうや、やらせて下さい。と十二回も頼んでいます。それに対して、それなら、おまえがやれ。その代わり、財政的援助は全然しないよ。お前が勝手にやれという態度であったでしょうか。

朝山
費用がないから、十郡寄せなどという出雲十郡から人夫を駆り出したというのも、費用節約の一つの方法であったと思う。それと先程夢だったのか、使命感だったのかという面ですが、太兵衛は大橋川の改修工事にも参画しているし、その前には斐伊川の改修にもたしか参画したのではないかと思う。そういうものに関係しながら、どこかに水を抜かないと、松江や周辺の洪水は防げない。そういう点で、佐陀川をどうしても作らないと、放水路を作らないといけないという、ある種の使命感を持っていのではないかと見ている。

藤岡
小室さん、何か。

小室
強引に進めて言った罪滅ぼしが、手水鉢とか何とかではなかったかと僕は思う。藩がバックアップしてきちんとやっていれば、あんなことを個人でやる必要はなかった。多分強引に押してでもやるんだと、やっていったから、後で配慮として、手水鉢を作ったりなどしたりではないかと僕は思う。そういう強引さがある面で見えるから、最後に死因が果たしてと、いうことになってしまうんだろうと思う。やはりやっていく途中でいろいろな反対もあったろうし、城の方で反対もあった中で無理矢理やっていったことから、絶対敵は作っていっただろうということから、僕はやはり他殺が自然だと思った。

藤岡
しかし先祖伝来の大事な、農民にとっては土地が個々の家では取られているのかしらないが、ほんのちょっとかもしれないし、場合によっては生きていけないほど取られた所もあるかもしれない。そういうことへの一つの罪滅ぼしに、手水鉢を寄贈するぐらいで、それでも犠牲になった農民の苦しみはあまり軽減されないであろう。・・・物理的には。

小室
それが武士階級かもしれない。だから、多少自分で目をつむってやって行った所もあるのではないか・・。

藤岡
そうするとゴーサインが出た時に、奇しくも十八石五人扶持の士分になったということに、意図的なものがあった。

彼を侍にしておけば、これから何をするにも強引なことをするにも、便利が良いという考えもあったかもしれない。

長野
そうだったと思う。そういう点で藩が全くバックアップしなかったとは考えられない。もちろん七万人の人夫がみんなボランティアでやったわけではない。日当が金だったのかコメだったのかは分からないが、相場程度は支給されたはずだ。時代は下るが明治三十三年、山陰で初めての鉄道建設工事が鳥取県の弓浜半島で始まった時の日当が現金五銭とコメ一升（一・五キロ）だった。この五銭というのがどのくらいの価値なのか分かりにくいが、当時、コメは一俵（六十キロ）が三円五十銭という記録があるから、一升だと八銭か九銭。もっとも当時のコメは、今日では考えられないほど貴重だったことを割り増しして考える必要はあるが…。

先ほど、藤岡先生が紹介された出雲私史をもとに作られた年表を見ると、安永七年から藩に五万両の蓄えができている。それからわずか六～七年ほど後に佐陀川開削の許可が出ている。それまで太兵衛が十数回も建言したのに聞く耳を持たなかったが、これは藩が頑迷だったというより、ない袖は振れなかったわけだ。しかし天明年間になって再々宍道湖があふれる水害があった。藩の蔵には多少の余裕もできた。そこで懸案の佐陀川開削が取り上げられるに至ったのだろう。

しかし、総延長八キロの開削をたった三年で完成させるというのは不自然な気もする。これは多分、正式な着工命令より前に家の子郎党などを使って、十分な下調べや準備をしていたのではないか。もちろん家老の三谷権太夫らから「佐陀川開削の沙汰がやがて下りるぞ」といった内報を、太兵衛はかなり前から耳打ちされていたとも考えられる。

もっとも当時の記録にある着工というのは、本格的な工事を始めた時で、測量とか設計などの期間は別だったろう。それにしても三年というのは、川筋の大半を昔からあった小川を利用したとしても脅威的だ。満を持してこの時を待っていた太兵衛が堰を切ったように工事を進める姿を想像すると鬼気迫るものさえ感じられる。

時代が下るが大正三年、松江にできた初代の新大橋（現在のは二代目）の工事期間はちょうど一年、現在ある二代目は一年四ヵ月で完成している。現在より工事が粗末だったとはいえ、バスも通る立派なものだった。これに引き換え、いまある宍道湖大橋は計画から完成まで二十三年もかかっている。完成した物の質が違うといっても、土木器材が格段に発達していることを考えれば、現在の土木建設工事は時間がかかり過ぎますね。特に道路や橋は…。

もう一つ、当時の人たちの人間像について。太兵衛より三百年ほど前になるが、フランシスコ・ザビエルがキリス

ト教布教のため日本にやって来ます。その時、ザビエルはアジアへ来たことのある船長が、あっちの教会に寄せた手紙に突き動かされてやってきたそうです。その手紙には「日本人は欲がなく、物惜しみをしない。しかし人のものを盗むようなことは、はなはだ憎む。外国について関心が強く、宗教心が篤い…」。好学心があって、欲がなく、その上宗教心が篤いとなれば布教に大変いい土壌というわけだ。ザビエルも張りきってやって来たと思う。そして日本に来て、しばらくしてからザビエルが本国へ送った手紙にはこうあるそうです。「日本人の多くは貧しい。しかし武士も農民もそれを恥ずかしいなどとは少しも思っていない。そして何事にも節度があって、物よりも名誉を大事にする…。」

当時でもこれが日本人の全部ではなかっただろうが、外国人から見ると多くの日本人は精神がきれいで、宗教家のような敬虔さをもっているように見えたらしい。この手紙を紹介している司馬遼太郎さんの言葉を借りると、当時の日本人は非常に高貴で、だれでも友達にしたくなるような人が多かったというわけです。太兵衛の時代にはザビエルのころより多少悪くなっていたかもしれないけれども、それでもまだ精神の豊かな人が多かったのではないか。太兵衛とか、この前、やはりＨＮＳ研究所が顕彰され、小説・児童文学・マンガの三部作が出た八雲村の周藤弥兵衛などもその典型だ。太兵衛は佐陀川開削の最大の功労者という名誉すら欲しいと思わなかったようだが…。

昔はこんな志の高い人が村に一人ぐらいずついたようですね。例えば出雲の高瀬川を開削した大梶七兵衛とか、同じく出雲の長浜に防風林を作った井上恵助など。これらは百姓といっても大地主で、水呑み百姓とは違うわけだが、自分自身の欲が全くないわけではなかっただろうけれども、それよりみんなのためとか、自分たちが暮らしている地元のために身上を投げ出すようにして難事業に当たっている。

それから先ほど、滝倉さんが提案された「太兵衛まつり」、大賛成です。佐太神社の境内で毎年、時期を決めてやって名物にして下さい。ついでにいうと清原太兵衛の銅像も欲しいですね。せっかく太兵衛のイメージそっくりのモデルもおられるようですから…。

藤岡　いや、結構な話です。

藤岡　これでひと通り太兵衛像という点について、皆さんのご意向を伺った。

これからは清原太兵衛の顕彰事業がこの地域の活性化につながらないかという観点から、ご意見を伺っていきたい。

さあそれでは朝山さんの方からずっとこっちの方へ向かって、まだ四十五分余りありますのでお一方数分ありますから。

朝山　今までにも清原太兵衛の顕彰事業ということは何回かは行われてきたが、確かにその場限りで終わっていて、今日学校のこどもさんの読書感想文の発表があったが、これからの若い人達に如何に太兵衛の行った使命感やら地域の人に対する思いやりとか、そういう物を教えていくというところから始めたらどうかと思う。

藤岡　ありがとうございます。

では瀧倉さんお願いします。

瀧倉　私が一番初めに申し上げたが、いい作品ができたので、映画のドラマにもなりそうだし、テレビのドラマにもなればすばらしいなと夢みたいなことを考えている。

それから先程長野さんにも取り上げて頂いたが、佐陀川と佐太神社との間は切っても切れない縁がある。松江市街地から合同汽船で佐陀川を通って佐太神社のお忌み祭りにずいぶんお参りになったものである。今はほとんどバスと車であるが、たまには船で佐太神社参りをするというようなことも良いではないかと思うし、何れにしてもお忌み祭りは年一回であるので、その機会に併せて佐陀川なり清原太兵衛を偲ぶ、何かそういう松江でやっている源助祭のような催しが良いのか、或いはもっとこのような大会のようなものが良いのか、これは鹿島町だけでなく、松江市も一緒になって年一回の偲ぶ行事を取り入れたら、いつまでも流域に住む人達がもっともっと佐陀川と清原太兵衛を偲ぶよすがになるのではないかと思う。

佐太神社前の紀功碑の文字を読んだ人もあろうが、漢文で書いてあってなかなか私にもよく分からない。そこでやはり分かりやすいような説明文もあちこちに建てるのが良いではないか。先程私は朝日山の東の展望台にそういう物があったらよいではないかと言ったが、最近佐陀川の宍道湖側に自転車道がついたが、その入り口の所に佐陀川についての説明文がある。これは大変やさしい文章で清原太兵衛の遺蹟が上手に書かれている。この橋の名前が太兵衛橋という。これは関係する小学校の児童から募集したものである。たまたま古江の小学校の子供の「太兵衛橋」が採用

されたのであるが、やはりいろいろなことを通じてこれから末長く顕彰事業を続けていけば大変結構で、今年はそのきっかけになる年になるのではないかと思う。

私は先程申し上げたように佐陀川をわたる時には一瞬でも良いから先人を偲ぶという習慣づけを今日からしてみたいと思っている。

藤岡

先程の発言でもあったように、生涯学習でも何かやるべきでしょうか。

瀧倉

そうですね。大変な恩恵を受けているわけであるので、やはり生涯学習としてこういうものを勉強するということによって、河川浄化とか佐陀川をかつては大変大事にしていたが、最近では土手からごみを捨てるというようなこともあるので、学習を通じてそれが市民運動として水をきれいにするとか宍道湖をきれいにするという、住民運動につながればよいがという願いを持っている。

藤岡

そうですね。本当ですね。

せっかくのご意見に、私が茶化して申し訳ありませんが、今イベントを、例えばお忌み祭の日にやった方が良いではないかと言われたが、あの頃はよく荒れますが、別の時が良いではないでしょうか、今ごろは天気が変わるが。

瀧倉

太兵衛は桜を佐太神社の前に植えたいとおっしゃっていて、今も古木が残っているが、やはり桜の咲く時分が良いかも知れませんね。

藤岡

ありがとうございました。

次は小室さんどうぞ。

小室

僕は地元の人間でないので、あまりいろいろな状況が詳しくないんで、太兵衛の問題が長く続くということと、子供に向けて発信した物だから、太兵衛の銅像を作ったら作ったで、その前に目安箱ではない夢箱のようなものがあって、こうなったらいいなとか子供たちの意見が入れられるような、やはり人間というものは弱いもので、自分なんか何が出来るものかというようなことで、夢がつぶれていることが多い。子供のうちから夢とか、こうなったらいいなといったことを発言する場・・・縮こまらないで、伸び伸びとした発想というものを取り上げられるように、そういうものを子供たちが伸び伸びと発想できるようにしたらいいじゃないかと、そんな風に思った。

何かこう平和なのと落ち着きすぎて、何か突破口を作って飛び出してくるような子供が、もしいるならば気がつくだろうし、そういう物を作ったら面白いと思う。

藤岡

漫画と子供たちということで、私も、テレビで漫画をちらちら見るだけだが、例えば、ウルトラマンとか、ギャッとかウッとか超人的な物とか、よくくりくり変身する物とか、そういう主題の物とかが好まれる中で、太兵衛の漫画というのは、昔の物にならざるを得ない。ゆっくりした展開と説明的な内容・・・子供がそれに食らいついてくれないといけないが、それはどうでしょうか。

小室

僕は漫画というものは、大人の締め付けた枠というものを取り外して、思い切り発想するという意味では、どんな漫画を読んでもいいと思っている。これを読んではいけない、あれを読んではいけないと言うのではなく、兎に角何でも読んで、乱読してみる。そのうちにきっといい物を見つけて読むようになるものです、人間というのは。ですから漫画でも一緒です。枠を締め付けて子供に与えたら、子供はそれを敏感に感じて、自分の心の中の物を出さなくなるのです。

いっぺん、枠・・殻をはずして、子供は面白い発想をしますからね・・・いろいろと・・・大人が余計なことを言わなければ、そういう癖がついて僕らの様になるが、いい物を読みたければここにおられるし。子供というのは非常に個性があって、出発する場所がいろいろ違う。いい物から入っていって文学に入っていく者もおれば、とんでもないSF物を読んだり或いはへんてこりんな物を読みながら、結局中心に向かって行くものだ。どの道を登っても、山のてっぺんへ着くのは一緒だというみたいなものだ。だから僕なんか選んで本を読むということはない。めちゃくちゃに乱読した。その割にたいした事は思いつかないが・・・今はそれだけ情報が多いし、その中に自分だけの情報とか、自分に合った情報を集めるようになるだろうと思う。

藤岡
そういう点では、先生の本なんかをもっと子供達の間で、永続的に読んでもらわないといけない。

小室
学校に入れてもおかしくないから・・・世の中にはいろいろな本が氾濫しているから。

藤岡
次ぎに村尾先生。先生も町外の人だが、思い切って言ってください。

村尾
シンポの流れを遮るようで申し訳ありませんが、この会場に清原太兵衛ゆかりの人、子孫の方が来ておられるでしょうか？
子孫の方々の気持ちの良い御協力があって私達は物語を書かせていただくことができました。勝手なことを書かせていただくことができました。勝手なことを書かせていただき、まずここでお礼を申し上げ、感謝したいと思います。ありがとうございました。
御質問の町のイベントのことですが、先年より益田市が市民芸術祭に益田をテーマとした絵画を全国より募集しています。年々、盛会になっているように聞いております。今、桜の花が咲く時期という話がありましたが、例えば、清原太兵衛のゆかりの佐太神社周辺とか、朝日山とか、太兵衛にゆかりのあった土地を中心に広くは鹿島町を見直すという点で、スケッチ大会などいかがでしょう？入選作品をどこかで発表するとか。そういったことが継続的にできれば、参加する人や作品も鹿島町をテーマにとか桜をテーマにとか、大人も子どもも参加できて、しかも、広範囲の人の参加を見込めるのではないでしょうか。
それから、私などは町外から来て小説を書かせてもらったという御縁だけで、ここで勝手なことを述べさせてもらっていますが、昼からずっと長い間つき合って下さっている町の人や本を読んで下さった方が、これだけは言って帰りたかったのに・・・という思いが残ってもいけませんので、後で、一人でも二人でも会場のご意見を伺っていただけたらうれしいのですけど・・・。

藤岡
この前発言のときあったが、例えば物語り・・・民話というのは、おばあさんから語り伝えられる。そういうふう

に太兵衛もなりたいものだということですね、しかし、現実にはその体制は、現在はあまりないですね。若いお母さんが・・・。

村尾
多分、この本を作ったきっかけの一つに、この本を媒体として父子、あるいは、母子、祖父母と孫の話題作りに役立てばという気持ちがあったと思います。子ども達も漫画や小説を読んで、もっと詳しいことが知りたいと思って父母に聞く、そこで共通の話題ができますよね。そして、父母は、よくわからないから、さらに祖父母に聞くとか、一緒に調べてみるとか。そういった形にもっていけたらすばらしいですよね。この町のイベントのたびに清原太兵衛の名前を伝え続けられたらいいですね。また、私達の書いたものとは別に、民話風と申しますか、お父さんお母さんの作った太兵衛のお話もあってもいいと思います。
これがお父さんお母さんの伝えたかった鹿島町の太兵衛だよと伝えてもらえたら、太兵衛さんもよろこぶでしょうね。

藤岡
そうですね、その辺が基本ですね。
では、寺井さん、地域活性化に、これを如何に活用して行くのかということで。

寺井
私は意外に発言時間が短く、あれもこれもと思っていたのに・・・私自身の全精力そのものは、作品に出ているのだから、その辺でと思いながら、皆さんの意見を伺っているところである。申し遅れた事で今までのところ作品を書く上で、二点ほど頭に描いていて落とした事がある。
一つは、社会補償的な制度というか、今米の問題があったが、そういうことが若干あるのではないかということ。もう一点は藩札との関係である。これもこの間、ある先生が山陰中央新報に出しておられたが、藩札という物と財政、それとの社会の流通・・・そういう物が面白くかみ合っておる。この辺のところについて、私も若干触れたが深く立ち入ってみたい。出来れば論議もしてみたいと思っている。
テーマとして与えられた、これからの活性化についてであるが、私はやはり太兵衛を顕彰するということは太兵衛の志をもう一遍振り返ることだと思う。
私は作品のなかでも申上げたが、三つあって

① 川を作って洪水をなくし、宍道湖を治めて行く。
② それによって出来る農地・・・新田を開発して行く。これによって周辺農民を潤して行く。
③ 日本海と宍道湖とを結んで、今日考える以上に交通・・・これが重視されていたのではないかと、場合によっては、これによる収益さえ相当発生したのではというようなことも聞いたが、この交通という面が非常に大きな問題としてあったのではないかと思う。

まず一点目の洪水の面だが、誰かが朝日新聞（？）で論議されていたが、私の認識とは違うが、私は過去宍道湖と宍道湖周辺では、過去大きな変化が三度あったと思っている。

一回目は、私の認識では宍道湖と日本海とは通じていたのではないかという考え方。これがつぶれたという事実。このことによって、宍道湖が生まれたのではないかということ。

二回目は、慶長年間であるが、寛永年間であるか、斐伊川が方向を変え、日本海に流れていたものが宍道湖に流れるようになった。このことによって、宍道湖水系というものが非常に大きく変わってきたのではないかということ。

三回目は、やはり佐陀川の開削であったと。佐陀川の開削ということで、この周辺或いは宍道湖の様相が変わったと思っている。事実佐陀川の開削によって公害というものが生じており、周辺の塩田が消失したとか、或いはいろいろな問題が起こったというわけである。開削によって、宍道湖がどのように変わったかということも研究し、或いは振り返って見る必要があると思うのである。

三回目に関連して・・・私は四回目と考えるが、大きな変化は、現在ある斐伊川→宍道湖→中海をつなぐ水系であり、特に象徴的なのが中海水系の問題である。中海水系の問題については、私はあまりにも主流というか川の流れだけをテーマにしておられて、もう一度大学の先生方、色々ご指摘はあるが、振り返ってみて、佐陀川がどのような影響を与えたのか、与えているのか、このようなこともよく調査した上で、この干拓問題についてもご検討ご提言頂きたい。

私の主張は、やはり自然というものは、或いは自然を壊すというか、自然がいろいろな変化して行くと、それとの調和とその繰り返しであろうと思う。必ず自然は、また次の調和を生み出して行くもので、私はそういう意味で、やはり流れは流れに沿って行った方がよいのではないかと思っているが、これはまた論議のあるところであるが、いずれにしろ水系問題については、もう少し中海の方にとらわれず、もう一度佐陀川の事実というものを取り上げて頂きたい。このことこそ、太兵衛が残した大きな教訓であり、また今日的な意義があるのではないかと、こう思っているところである。

それから②の農地の造成であるが、農地の造成はすばらしいものであって、佐陀川周辺の穀倉地帯が西日本有数の早場米産地である。私もかつて経済連で直接米を販売したものだから、こう言っていいかどうか若干危惧はあるが、例えば、この地区の米なども太兵衛米というような銘柄をつけることが出来るかどうか、或いは全国有数の早場米産地というものに、何らかの形で太兵衛の思いを反映させるということもあってよいのではないだろうか。

いずれにしても、あの水系が佐陀川によって出来上がっているということは、まず多くの人が、特に若い人はご承知ないので、せめてそのくらいは思い起こしていいのではないかと、そのように思うわけである。

③川の交通の問題である。今までずいぶんいろいろな方がご指摘なさっている。かつては川が交通の主流であって、合同汽船もあったし、或いは佐太神社とか恵曇まで通じていたという実態もあるし、自動車が栄えるまでは、それが主流であったという事も聞くわけである。どなたかの話にもあったが、もう一度川を見直すということも、太兵衛の顕彰という事の義務ではないかと、このようにも思う。

佐太神社の周辺に、太兵衛が言うように桜を植えるとか、そういう時期にボートの流れるイベント等、何らかのイベントをされたり、或いは今松江市が湖北地区に力点を置いている色々な開発・・・ぜひ松江市との連携と深め、大橋川、宍道湖、佐陀川のいろいろな開発というか、なによりも自然を或いは太兵衛の思いが通ずるような施策というものをなさったら如何なものかと思う所である。

それからもう一点、いろいろな方が言われたが、確かに歴史の人物というものは、実像とは違うもので、私も最近になってこのことを実感として味わうのであるが、やはり歴史上の人物というのは実在した人間と、それを発掘した人間と、それを育てた民衆というか地域の方というか、それによって出来上がるものである。私も一つの提言として、私の太兵衛像を提言したわけで、顕彰会の皆さん、地域の皆さん、やはりこうだったろう。このような方だったんだと或いは私の中の太兵衛はこうなんだというものが五年、十年かかって形作られて、子供の目にも出来たとすれば、銅像を見るときにああこうなんだ、この太兵衛はこうだったんだというものが定着するようなものにされたら如何かと、話を聞きながら思う次第である。

藤岡

ありがとうございました。
大変多岐にわたったがいろいろなご示唆を頂きました。
それでは長野さん、殿（しんがり）をよろしくお願いします。

長野

時間がないと思って先ほど、いいたいことを全部いったつもりですが、時間をいただけるなら最後に二点だけ。一つは、よくいわれることだが、行き詰まった時は少し後に下がって見よう、ということです。言い換えれば歴史に学ぶということ。当地の御津出身の松江の乾さんが何かに書いておられるが、トンネルを掘る時、方向が正しいかどうかは少し後の方に水準器を置いて見るとよく分かるという。いま日本は閉塞の時代だといわれ、右を見ても左を見てもさっぱり見通しがきかない。立体的な見通しがきかないなら時間軸を戻して見てはどうか。このあたりは藤岡先生の領分で、私がいうのはいささか気恥ずかしいのですが、私たちはもう少し歴史に学ぶ習慣を持つ必要があるように思う。今回、私たちは清原太兵衛のことでたくさんのことを知った。それは単に太兵衛がああした、こうしただけではない。あの時代の人たちの生きざま、志の持ちよう、大切にしていたものなどだ。これは今日に生きる私たちにも大きな教訓を含んでいるように思う。

会場に鹿島町東小学校の奥原校長先生が見えているのではないかと思うが、あの奥原先生は地域の歴史や風土に学ぶということを若い時から実践しておられ、各任地それぞれで見事な足跡を残して来られた。先ほど、太兵衛についての本の感想文コンクールの表彰式で東小の児童が多かったので「やはりな…」と思った。

歴史に学ぶ資料という点では、島根県は幸か不幸か高度成長が素通りしたお陰で、ふんだんに残っている。斐川町荒神谷の銅剣や加茂町の岩倉の銅鐸など、それまでの考古学の常識をひっくり返すほどの発見もあった。佐陀川開削でつぶされた身澄ヶ池も、今日的な視点から見れば、古代の信仰などを知る上で貴重な資料が埋まっていたのではないかと想像される。このほか西日本で最大規模だった佐太講武貝塚も分断されたが、昔に壊されたものは仕方がないとして、幸い今日に残っているものは大事にして、そこから学ぶ姿勢がいま一番大切だと思う。

学び方はいろいろある。シンポジウムも一つの方法だ。しかし本来、古代ギリシャで始まったシンポジウムというのは、こんな小むつかしい顔をして壇上に上がったりせずに、酒を汲み交わしながらワイワイガヤガヤ言いたいことを言い合うことだった。ただし、中心にプラトンという偉い哲学者がまとめ役としていた。本日はその役を藤岡先生

にお願いしているわけですが…。プラトンはカンカンガクガクの論議というより酔談の中から、重要なことを拾い出してまとめた。プラトンの哲学のいくつかの代表的な論文はこの成果だったといわれる。これに習ってもっと小規模でいいからシンポをやったらどうですか。集まって酒を飲むだけなら、いつでもやっているという方もありそうだが、それでも結構。ただしだれかプラトン役をやって下さい。

もう一つは全く違った話です。最初に私は子供のころ、佐陀川で泳いだと言ったが、最近の佐陀川を見ると泳ぐ気がしない。水門が締まっているわけでもないのに、よどんでヘドロだらけのように見える。私は一昨年夏、浜佐陀の満願寺沖の宍道湖では泳いだが、あの時、同僚たちから大丈夫なのかと言われた。ちょうど〇一五七中毒が広がっている時でもあり、自分でも多少心配がなかったわけではなかったが、それより宍道湖を見ていたら泳ぎたい魅惑の方が勝った。しかし、今の佐陀川では余程の懸賞金でもつかない限り、飛び込む気になれない。これをなんとかしてきれいにして欲しい。

しかし、これをボランティアで掃除をするというのは大変だ。先ほど、どなたかの話にもあったが最近、松江の京橋川がきれいになった。あれは松江市がヘドロを除去して宍道湖の水をいれたためだけでなく、堀川遊覧などでお掘を利用するようになったからだ。佐陀川もヘドロ除去は沿岸自治体にやってもらわないといけないが、きれいさを持続させるためには佐陀川をもっと利用することだ。先ほど、だれかの話にあったように、かつて佐陀川は宍道湖の排水だけでなく運河としての利用の方が大きいくらいだった。

利用の方法について私は資料を持っていないが、「松江食べ物語」を書いた松江の荒木英之さんや、荒木さんを盛り立てているファンの方（鹿島町にもおられるようだが）たちがいろいろ構想を持っているようだ。佐陀川を遊覧船の停泊地だけに使わず、松江からのんびり船で佐太神社なり鹿島町なりに来たくなるような策を考えて欲しい。これが佐陀川で産湯を使った元少年の願いです。

長野

以上で二時間半経ったが、先程村尾さんがおっしゃったように、皆さん方は聞きっぱなしでありました。時間もないが、ここで一人でも二人でも一言質問してやろうとか、或いは意見をいってやろうという方がおられれば、マイクが回るのでよろしくお手を挙げていただけませんか。

質問一

清原太兵衛の生涯の安永五年格式御徒並作事所横目というのは、現在の例えば兵隊の位で言うとどのあたりになるか。

佐陀川開削工事費は、今の費用ではどれくらいになるか。

長野

費用は今、ざっと計算したのですが、作業に七万人動員したといわれるので現在の日当二万円で計算すると、これだけで十四億円。犠牲者が三人出ているのでこの慰謝料・補償金一人一億円として合計三億円。佐陀川の河川用地は幅平均五十メートル、長さ八キロ。この用地代だが、これは古い川筋もあるけれども、価値の高かった神社の神域などもあるので平均五万円とすれば約六十億円。十万円とすればその倍の百二十億円。このほか雑費を含め土地代が五万円なら約百億円。十万円なら、ざっと百五十億円といったところでしょうか。現在なら土木器材が格段に進歩しているので作業費はもっと安く上がると思うが、その代わり補償費や交渉費がかさんで、とても百億円とか百五十億円ではできないだろう。この費用はもちろん松江藩も出したが、周辺の大百姓や分限者も金やもので大きく支援したと思われる。さらに無名の農民たちも厳しい労働で、汗や時には血で、少なからぬ犠牲を払ったはずだ。そのことを私達は心の片隅に覚えて置くことが大事だと思う。

寺井

私のイメージとしては、兵隊の位では中尉か大尉くらい、中尉くらいかなというところだ。

藤岡

大体の所中尉か大尉という所でご想像頂ければと思います。

もう一方どうぞ。

質問

となりの生馬町から参加したものですが、鹿島町の皆さんは、生馬町を通って松江に出られるわけだが、滝倉さんと同じ仕事をさせてもらっている。

シンポジウムをこれで終わらせないで、これからどう続けていくかという話の中で、私は長野さんと同じく佐陀川で泳いだ者で、浜佐田の潟の内で泳いだ者である。掘られた川で、遠浅ではなく、深くて、先輩に突き落とされながら泳いだ者である。今こうしているのが不思議なくらいである。

寺井さんの話があったように、宍道湖が田んぼに変わって湿田であるので、どじょうがたくさん繁殖していて、そのどじょうを殿様が鷹狩の餌にした。それを取った権兵衛が、どじょう掬いの起こりで「私の生まれは浜佐陀生まれ」そういう歌が、全国で歌われているわけであるが。

最近、長野さんが言われた「太兵衛かに」のことであるが、圃場整備があった頃までは居ったが、農薬か何か詳しいことは分からないが、赤い「かに」が姿を消してしまった。朝日山にはいったではないかと、或いは多久川の方にもいったのではないかというふうにも思われるが、そうした「かに」が、毎回のシンポジウムに展示されたり、佐陀川沿岸を歩く姿を見たいと思うので、何かそういうこともこれからのテーマに取り上げて頂きたい。

朝山

「太兵衛かに」の話が出たが、「太兵衛かに」というのはハマガニで佐陀川のごく一部にしかいないかにである。普通そこいらにいるものと全く違い、色は茶色っぽいというかちょっと黒味のかかった、あまりきれいなカニではない。色としてはあまりきれいではない。習性としては、真っ直ぐ田んぼの中に入って行く。夜間になると出てくる。真っ直ぐ穴をあけるので、田んぼの水持ちが出来ないから、カニを皆殺してしまう。だからこの頃は見つけることが困難になっている。非常に限られた範囲にしか生息していない。今おっしゃった朝日山の下などには絶対にいないカニです。佐陀川のごく一部にしかいないカニである。

一寸追加しておく。本物を見たい方は、鹿島町歴史民族史料館に標本を保存しているのでご覧になればよろしい。

藤岡

ありがとうございました。

フロアからお二方に非常に有意義なご質問ご意見をいただき、誠にありがとうございました。

今日はシンポジウムの先生方六人と私と七人で約三時間にわたり、話し合いをしました。

太兵衛という意志の人、或いは何というか「百折弛まず、千挫屈せず」一つの目標に向かって突き進んで、いわゆるパブリックのために生きたという、最後は「燃えつき症候群」の如く去って行ったという、そういう人の生きざまというものを、現代的な意味付けをすることによって、今、我々に或いは若い者、年寄りを含めた我々日本人に欠けた所を補って余りあるような生き方ではなかったかということを、先ず再認識をいたします。それを学校教育なり生涯学習の場の中でみんなで学習しあって行く、そういうことが大事だという風なことがまずあった。

今一つはその出来上がった佐陀川についてのいろんな思い出、文化、そういったものをもう一度復元する「太兵衛かに」が出てくるような安心して水浴びが出来る佐陀川であり、古浦まで水浴びに行ったり、佐太神社の祭りに船で行けるような、そういう昔の面影をもう一度再現する、そういうことをやってみたいものだというような意見もあった。

今日のシンポジウムの問題提起というものは極一部であるが、こういった一つの提起を受けて、本日この会場に来られた皆さん或いは町当局の方々、また広く島根県中の方々、これ以後こういう昔の意志に生きた一村一志の人々のふるまい・行動というものをもう一度現代的に呼び起こして、新しいむらづくり、地域づくりにこれから役立てて行きたいと思います。

そのためのシンポジウムであったが、司会者の不手際もあり、なかなかフォーカスが定まらないで終わってしまったという恨みがあったが、この辺でご勘弁頂きたいと思います。

パネラーの皆様方大変ご苦労様でございました。

藤岡

会場のみなさん、どうも長時間にわたりありがとうございました。

司会

皆様長時間お疲れ様でした。大洪水があるたびにどうにかしたくて、どうにかしなくてはと佐陀川の開削に取り掛かり、苦難した結果、成功させた清原太兵衛翁。本当にすばらしい考え、行動力のあった人だったということが講演、シンポジウムを通して良くお分かり頂けたんではないでしょうか。

では、本日の清原太兵衛シンポジウムの日程をこれをもって終わります。

最後に清原太兵衛顕彰会副会長である安達哲也がお礼のご挨拶を申し上げます。

安達

本日は皆様方には最後までご静聴頂きまして誠にありがとうございました。講演を頂きました藤岡先生を始め、シンポジウムに参加頂きました諸先生方には、ご多忙のところ鹿島町までお出かけになり、貴重なご見識をご発表頂き本当にありがとうございました。厚くお礼を申上げます。

私達が毎日何気なく眺めていた佐陀川の開削が、如何に重要な意義を持っていたのか、その恩恵が如何に大きかったのか、改めて知らされました。

また、これを開削した清原太兵衛翁が、いかに偉大な人であったのか、その高い志、強固な意志、如何なる困難にもめげない行動力などについてもいろいろと教えられました。

私ども顕彰会としましては、本日の催しで得ました教訓を今後に生かし、清原太兵衛翁の偉大な功績を顕彰する中で、佐陀川の維持保全を図るとともに、地域づくりや人づくりにもつながるような活動が進めていければと考えております。

本日ご出席の皆様方には、今後とも顕彰会の活動にご理解とご協力を賜わりますよう、最後にお願いする次第でございます。

最後に、本日の催しが盛会のうちに終わりましたことに、重ねて感謝を申上げてお礼のご挨拶とさせて頂きます。

司会

皆様最後までご協力頂きましてありがとうございました。どうぞお気をつけてお帰り下さい。